

Transcript of Lecture: A Part of Lecture on "The Wealth of Nations"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17508

『国富論』講義

第1編 商品論「分業・価値・価格そして市場」

山 辺 知 紀

ここに掲載する文章は、論文でも資料でも研究ノートでもない。これは、わたしが1986年10月から当学部で行なっている経済学史の講義テキストの一部（pp. 87-133）である。このようなものをここに発表するのは、場違いであるし恥ずかしいが、理由があってあえて発表することにした。この「論集」は、毎号、学生に配布される。現在わたしの講義を受講している学生諸君には不必要だろうが、少なくとも前年度受講した学生諸君に対しては、これを印刷して配布する意味は、わたしにはある。わたし自身、前回の講義ののち、いろいろと講義内容について反省するところがあった。自分の欠陥も知ったし、新しい考え方に触れて自分の考えを変えねばならないと感じたところもあった。そのため現在、テキストの全面的な改訂を行ないながら講義をつけている。本来ならそれを全部印刷して考え方や解釈の変ったところを示すべきだし、新たに書き加えたところも示すべきだろう。しかしそれは物理的にも不可能なので、その一部分、といっても講義全体のなかでは重要なところである『国富論』第1編について、その部分だけを印刷にまわすことにした。もしこの部分以外のところも必要だという諸君がおられるなら、その旨を伝えてほしい。原本は保存してあるので、いくらでも増刷りして希望に応じるつもりである。

なお、このような性格の文章をここに掲載することを快く許して下さった経済学会編集委員の方々にお礼を申し上げたい。またここで引用した『国富論』は、大内・松川訳『諸国民の富』（岩波書店）である。

これからいよいよ『国富論』第1編の話しに入る。この第1編のタイトルは、「労働の生産力における改善の諸原因について、また、その生産物が人民の様々な階級の間自然に分配される秩序について」である。すでにここからこの第1編についてのある程度のイメージを創ることも可能だろう。そして具体的にここで扱われるのは、分業・価値・自然価格といった一連の言葉である。これらの言葉によって、生産の改善から更には富の分配にいたるまでの自然的なプロセスが叙述されるわけである。以下それを順を追って説明していこう。

〔I〕 分業論と貨幣論

(1) 分業論

スミスは、この第1編を分業論から書き始める。この分業論の叙述は、その中が更に「分業について」・「分業を引き起こす原理について」・「分業は市場の広さによって制限されるということ」の三つの章に分かれている。分業の叙述の次には、貨幣についての短い章が置かれ、そこから価値論・価格論へと進んでいく。それではまず分業論から見ていこう。それは以下のように書き出される。

「労働の生産諸力における最大の改善と、またそれをあらゆる方面に振り向けたり、充用したりする場合の熟練・技巧および判断の大部分とは、分業の結果であったように思われる。」(p. 68)

スミスにとっては、すでにその序章のところで富＝必需品・便益品 (the necessities and conveniences of life) という前提が提示されている以上、その必需品・便益品を作りだすものとして労働を表象するのは容易であるし、さらにその労働にたいしてもこれを分業として捉えてみせるのは容易だったのかもしれない。かれが具体的な分業の例として挙げているピン製造業の話しは有名である。

「この仕事は現在営まれている方法によると、全作業が一つの独自の職業であるばかりでなく、それはいくつもの部分に分割されており、しかもその諸部門の大部分もまた同じ様に独自の職業なのである。一人の男は針金を引

き伸ばし、もう一人はこれをまっすぐにし、第三の者はこれを切り、第四はこれをとがらせ、第五は頭部を付けるためにその先端を研ぎみがくのであって、……(かくして)一本のピンを作るというこの重要な仕事は、約18の別個の作業に分割されている」。場合によっては一人が一行程のこともあろうが、同一人がその中の2・3のものを行なう場合もあるだろう。スミスが見た例は、10人しか雇傭されていない製造場であったが、「彼等は極めて貧乏で、したがってまた必要な機械類もむしろ不完全なものしかあてがわれていなかったけれども、精だしてやりさえすれば、皆で一日に約12ポンドのピンを作ることができたであろう。1ポンドのピンと言えば、中型のものにして4000本以上になる。それゆえ、これらの10人は、皆で一日に48,000本以上のピンを製造できたわけである。したがって各人は、48,000本の10分の1、つまり一日に4,800本のピンを作れたと考えて差し支えない。けれども、もし彼等のすべてが個々別々に独立して働き、またその誰もがこの独自の仕事のための教育を受けていなかったなら、彼らの各々は、一日29本はおろか、おそらく一本のピンさえ作れなかったであろうことは確かであり、言葉を換えて言えば、彼等の各々は、その様々の作業の適当な分割や結合の結果として現在行なえものの240分の1はおろか、おそらくその4800分の1さえなしえなかったであろうことは確かなのである」(pp. 69-70)

たしかにスミスが上に挙げた例はきわめて説得的に分業によって富＝必需品・便益品の生産が飛躍的に増大することを教えてくれる。しかしスミスの分業論の特徴は、単にそれが企業内にとどまるのではなく、社会的な分業へと直線的に拡大されるどころにある。分業によって生じた諸個人の技術・才能等の違いを社会的共有物としてその上に成立する社会的分業・結合労働を構想してみせるところにスミスの積極的主張を読むことができる。社会と企業とが、質的には同じでただ量的にのみ違うように、かれのなかでは捉えられる。だから上のピン製造業の例がそのまま社会に拡大されて、この分業社会は飛躍的な生産力を獲得し、その結果、社会の成員はその富裕の分配にあずかることになる。かれは次のように言っている。

「統治が良くいきとどいた社会では、普遍的な富裕が人民の最下層の階級にまで広がっているのであって、これこそは、分業の結果、ありとあらゆる

技術の生産物が大增殖したために引き起こされたことなのである。あらゆる職人は、自分自身が必要とする以上に、処分しうる自分の所産を多量に持っており、またあらゆる他の職人もまさしくこれと同じ立場にあるから、彼は自分自身の多量の財貨を他人の多量の財貨と、またはこれと同じになるが、他人の多量の財貨の価格と交換することができるのである。彼は、そういう人々にその必要とするものを潤沢に供給し、またそういう人々は、彼にその必要とするものを十分に調べてやるのであって、そこで一般的な豊富が社会のありとあらゆる階級を通じて行きわたるのである。』(p. 78)

たしかに、スミスのこうした分業の生産力に対する信頼は、資本主義社会のもつ階級的矛盾、言い換えれば虐げられた人々への眼をふさいでしまっているかのようにも見えるが、少なくとも、彼にとってはこの現実の社会を、価値物の生産の場としてではなく有用物の生産の場として捉えていこうとしているのであり、それを考えれば、彼をそのように批判しても無意味だろう。そのうえスミスにしても、自分の眼の前にある社会での貧富の差などについて知らない訳でもなければ、それを無視しようとしているのでもない。ただ、彼が、イギリスの農夫とアフリカの王様との家財道具での格差の方がその農夫と近代ヨーロッパ社会の君主との格差よりも、はるかに大きいと述べることから想像されるように、分業の進んだ社会の富——有用物・使用価値として富——の普及化に対しては、彼は絶対的な信頼をもっていたのも事実である。

しかし、こうしたスミスの主張を当時の社会の中で考えたらどうなるのだろうか。マンドヴィル(1670-1733)の『蜂の寓話』——これは初め『ブンブンなる蜂の巣』(1705)という題で上梓されたが余り世間の注目を呼ばず、1714年に多くの注を付け加えて『蜂の寓話』として出版される。しかしこの版でも世間の注意を喚起できず、これが有名になったのは1723年の増訂版以降のことである——については既に先にも触れたが、このマンドヴィルの主張なども参考にしながら、このスミスの分業論の世界を考えてみよう。そのさい、先に挙げた分業論の三つの章の構成にも十分注意を払いながら見ていく必要がある。

最近、重商主義期の研究については、西洋史研究の分野から種々の目覚ま

しい成果が提供されている。(たとえばフェルナン・ブローデルやイマニュエル・ウォーラステイン、さらに日本では川北稔等の研究は経済学史研究者にとってもきわめて示唆に富むものがある)。それらの中で次第にわれわれの共有物になってきたのは、従来のような一国史的枠組で産業資本主義の成立を考える研究方法に対する疑問だろう。18世紀というのは、従来考えられていた以上に、世界全体を一つのシステムの中に包摂するような力が働いていた時代のように思われる。西ヨーロッパばかりでなく中近東からインド・東南アジアはもとより、中国・日本まで、さらには地中海沿岸は言わずもがな西アフリカ・西インド諸島から南北アメリカ大陸、そしてバルト海から東ヨーロッパの内陸部まで、世界全体が大きな商業のネットワークの中に組み込まれていたように思われる。『国富論』の編者キャナンでさえも、スミスが、当時の海運業の隆盛を述べた箇所に付けた注の中で、1805年に出たプレイフェア一版の『国富論』から「往航復航を平均すると、海路でのロンドン＝カルカット間の貨物は、陸路でのロンドン＝リーズ間のそれと同じ価格で運ばれた」(p. 89)という編者プレイフェアの言葉を引用している。リーズという町が、ロンドンとエディンバラの丁度中間に位置していることを考えると、当時の海運業の発達に改めて驚かされる。スミスにしても、この分業論の叙述において、「文明で盛大な国のもっとも普通の工匠または日雇労働者の家財道具を観察したまえ。そうすれば諸君は、この家財道具を調達するために、たとえわずか一部分にすぎなかったにしても、その勤労の一部分を費やしたものの数が測り知れないほど多い、ということに気付くであろう」と述べ、と同時にそれらの家財道具の中に遥かに離れた外国からの輸入物質が数多く含まれていることを述べるのである。

スミスは『国富論』の書き出しにおいて、富を必需品・便益品とおき、その前提で分業論を書き始めたが、しかしその背後に意図的に隠されている世界がある。一言で言ってしまうと、それは市場の問題である。すでに見たように当時の世界は大きな商業のネットワークの中に組み込まれており、イギリスも勿論その例外ではない。エリザベス一世治下の1588年のアルマダの海戦以降イギリスの海運業がこの世界の商業ネットワークの中で一層重要な役割を担ってきていたのは事実だし、17世紀の始まりとともに設立された東イ

ンド会社の活躍は周知のごとくである。だからスミスの目の前にある社会は、こうした市場——国内・国外を問わず——の存在を抜きには考えられない。にもかかわらずスミスは、分業論を考えるさい、市場については、第3章の「分業は市場の広さによって制限されるということ」の中できわめて原理的に触れるだけですませている。何故なのだろうか。もちろんかれは第2編の生産的労働とか第4編の重商主義批判の叙述の中で、この市場の問題を扱っている。そしてこうしたかれの方法を上向法として理解することは可能だが、その上向法のなかで演繹されてくる世界が、当時の社会にたいしてもつ意味は、やはり問われねばならない。そしてそれを考えるためにも、何故かれがここで市場の問題を隠して議論を始めたかを考える必要がある。

マンドヴィルの『蜂の寓話』で描かれているのは奢侈がもたらす経済的効果ということが出来る。奢侈は多くの有効需要を生みだし産業を興し労働者の働く意欲を刺激する。それをかれは、「私悪即公益」と主張したのである。これは先にも述べたスチュアートの世界ともつながる世界である。しかし最近の西洋史研究が教えてくれるのは、この頃のイギリスにおいては、次第に奢侈品という範疇が曖昧になってきたということである。度重なる贅沢禁止法にもかかわらず、それらが効果を失っていく背景には、庶民の生活の中に次第に贅沢品と呼ばれていたものが浸透しつつあったことを教えてくれる。(この辺りの話については川北稔著『洒落者たちのイギリス史』を参照されたい)。言い換えれば、奢侈品は当時すでに生活の中の「商品」になりつつあったといえよう。そしてその「商品」の市場は国内でも国外でも、社会的・経済的生活にたいして相当大きな力を持っていたといえる。

われわれが注意しなければならないのはこの辺りにある。たしかに以前の奢侈品の多くは「商品」となって市場を形成している。にもかかわらず、それらの「商品」は依然として奢侈品という範疇につきまわっている。マンドヴィルやスチュアートの有効需要説にしても、そこで言われている贅沢は貴人の贅沢であって、庶民の贅沢などではなかった。貴人の奢侈が社会の富を増殖させるといふときの発想には、しかし金色に輝く貨幣の影がつきまとう。そしてこれは、同時に貨幣の滞留とそれによる権力の誇示、さらには市場そのものの衰退をも結果しかねない。これの具体的な歴史的表現を、われ

われはいわゆる初期独占という形で知ることができる。弁証法的な言い方(!)をするなら、世界市場のシステムは、16・7世紀の絶対主義の成立によって飛躍的に拡大され精密化されたが、逆にそれを押し進めた諸列強の非合理的な欲望の増大の前に、その合理的システムを攪乱されてしまったとでも言うことができるかも知れない。そしてこうした事態は、商品—奢侈品—貨幣—専制主義(ナショナリズム)という連鎖が成立する限り、つづかざるをえない。

スミスの「私益即公益」とマンドヴィルの「私悪即公益」とは、たしかに一見するときわめて近くにあるように思われるが、しかし、それぞれのパースペクティブはまるっきり逆だともいえる。スミスのそれが構想する連鎖は、商品—必需品・便益品—労働(分業)—生産の社会的調和という流れである。そしてかれが『国富論』の冒頭部で市場の問題を意識的に避け、最小限度の叙述にとどめた理由もここにあった。

スミスは、先に引用したピン・マニュファクチュアの例の中で、労働の分割が、孤立労働に比べて比較にならないほどの生産力を可能にすると述べていた。たしかにこの例は説得的であるし可視的に分業の力を示している。しかしかれの分業論の叙述を注意深く読んでみると、分業のもつ生産力の優位性の議論は、これに続く貨幣章へとつながるのではなく、これをとばして価値論と直接つながっているようにも思える。分業論がそれに続く貨幣章への論理的な前提となるのは、分業によって浮かび上がってきた労働の有机的あるいは社会的な関係だろう。社会の中で有限で部分的な労働に従事している諸個人を、孤立した労働ではなく社会的労働の一環として捉え、そこでの生産物の交換というところから、貨幣章への展開が果たされるのである。にもかかわらずこの線はきわめて抽象的で捉えにくい。これを具体的に描けない理由は簡単である。もしもそれを具体的に太い線で描こうとするなら、市場の議論を先に片付けねばならない。しかし市場が問題になるのは、第1編では第7章「諸商品の自然価格と市場価格について」以降になってであり(厳密には第8章以降と考えるほうがよい)、その本格的な研究は第2編以降である。その代わりに、この分業論の中では、それは人間の交換本能とでもいうところから説明されるのである。「これほど多くの利益が引き出されるこの分業と

いうものは、本来、それが引き起こす一般的富裕を予見したり、意図したりする人間の英知の所産ではない。それは、このように広範な効用には全く無頓着な、人間の中にある一定の性向、つまりあるものを他のものと取り引きし、交易し、交換するという性向の非常に緩慢で漸進的ではあるが必然的な帰結なのである」(p. 81)。このように言うかぎり、市場の問題は背後に隠されてしまう。

現実の歴史過程は、上に引用したスミスの主張とは反対に、市場が次第に整備されてくるのに比例して社会的分業が進み、それに引っ張られてヨリ一層の生産力が必要になり、企業内分業も整備されるようになったのだろう。しかしそのように述べるかぎり、労働の motivation は市場からしか与えられないし、当時の市場の状況を考えれば、それは奢侈品市場からしか与えられないことになる。そして事実、当時の市場を支えている基本的なところは奢侈品への欲望であり、それによって動機づけられた労働だった。断わるまでもないと思うが、市場が奢侈品のみで構成されていたなど言っているのではない。奢侈品産業に引っ張られて市場が機能していたということを言っているだけである。スミスにとって特徴的なのは、市場にしろ市民社会にしろ、その現実の歴史過程とは全く別なところからその生い立ちを語ることによって、それらのための固有な時間を用意するということである。奢侈品と言われていたものが次第に日常的な「商品」になりつつあった時代において、スミスは逆に、日常品の上に新しい市場を構想しているといえよう。

スミスが構想する社会認識の連鎖は、従来のその対極に位置していた。かれは分業論のなかで、労働を必要物の生産のための社会的労働として位置づけ、それによって従来の奢侈品に代えて必需品を労働の動機づけにしたと言わねばならない。すなわち、社会の成員がそれぞれに与えられた必需品の生産に特化していかざるをえないからこそ、交換・市場の必要が導きだされるし、貨幣の必要もそこから演繹されることが可能になるのである。「いったん分業が徹底して確立されると、ある一人の人が自分の労働生産物によって充足しうるところは、そのもろもろの欲望のなかのごく小さな部分にすぎない。かれは、自分自身の労働生産物の余剰部分のなかで、自分自身の消費を越えて余りあるものを、他の人々の労働生産物のなかで、自分が必要とする

部分と交換することにより、そのもろもろの欲望の圧倒的大部分を充足する。こうして、あらゆる人は交換によって生活し、つまりある程度商人になり、また社会そのものも、適切に言えば一つの商業社会に成長するのである」(p. 93)。ここでの商業社会とは、まさに市場そのものだといえる。(もっともこれを非商品社会のモデルとして考えることも可能ではあるが……) こうしてそこでの諸個人は、自分に与えられた労働を通してかれの社会的役割を担うことになり、社会的存在としての自覚を持つことになる。

分業論での叙述から読み取られるスミスの意図は、奢侈品・貨幣の存在を知らされたところから始まる労働意欲の昂揚そしてその結果としての市場の発展・社会の進歩というロックやマンドヴィルあるいはスチュアートの構想に対抗して、新しい労働意欲の可能性を考えることだった。しかし、だからといって自給自足で自己の物質的生活を維持するだけでは、労働に対する意欲も制限されざるをえないし社会の進歩ということも語りえない。『道徳感情論』の慎慮の美德のなかで言われていた社会的名声のために労働するという主張も、この二つ（奢侈品か停滞か）の間をぬって、そのどちらにもいかずしかも労働意欲を社会的に保証していくためのものだった。いまこの分業論で語られていたことも基本的にはその同じ線上にある。人々は、分業を通して結合労働としての社会的労働を知り、そこでの自己の役割を担っていく。この社会では、孤立した存在でいようとするならただちに自己の必要物の充足が不可能になってしまう。社会全体がスミスの言う商業社会になってしまっているかぎり、そこでの成員は自己を駆り立てて自分に与えられた特定の仕事に専門化し、それを他者の生産物と交換していかなければ、生きていけないのである。しかしこれは、言葉こそ商業社会という言葉で表現されるとはいえ、明らかに「市場」の強制とも考えられる。にもかかわらずスミスは、市場の強制による労働意欲の昂揚ではなく、商業社会における必要物生産のための結合労働・社会的労働から労働意欲の昂揚をつくりだそうとしていたのである。奢侈品・貨幣に導かれた市場の論理をできるだけ排除して、必要品交換の場としての商業社会を持ち上げようとするスミスの意図は、こうして新しい労働の motivation を提示しようとするものだったといえることができる。そしてこれが果たされたとき、生産についての新しい合理的秩序

を構想することが可能になったのである。

先にも述べたように18世紀にはすでに世界的な商業のネットワークが出来上がり、そこでは合理的な商業秩序が形づくられていたと考えられる。ともすると重商主義期の世界は非合理の支配していた時代と考えられがちであるが、しかし世界的規模での商業のネットワークが常時機能していたということは、そこに一定の合理的秩序が存在していたと考えるほうが自然だろう。事実最近の研究は、そうした合理的な商業秩序——それは信用制度に象徴される——が当時存在していたことを教えてくれている。原理的に考えても、商業というのは種々の有用物を商品として均質化し計量可能なものとしていくのだから、そこにきわめて合理的な世界が出来上がるのは不思議ではない。それに対して生産の方は、逆になかなか合理化されない質をもっているともいえる。少なくともスミスの生活していた頃の社会ではまだ職人気質のようなものが残っていただろうし、それを再生産していくような生産システム——徒弟制度——も根強く残っていただろう。そして重商主義的「国家」の非合理性は、このまだ合理化されていない生産システムを「国家」の意志のもとに従属させているところに成立していたともいえる。奢侈品というものによって動機づけられる市場形成とそれに支えられる労働意欲の刺激は、貨幣としての富の追求へと人を駆りたて、それが結果的には商業の合理的システムを攪乱するほどになっていたといえる。言い換えれば、漸く成立し成長しはじめた絶対主義的な諸国家が、この商業ネットワークの覇権とそれによる貨幣としての富の獲得を目指して、目的意識的にそれぞれの国内市場を「育成」すなわち「管理」しはじめたことが、商業の世界的規模でのネットワークを攪乱させる遠因になっていたともいえる。そしてこれは、すでに述べたように、マンドヴィルやスチュアートの商品—奢侈品・貨幣—専制主義（あるいはナショナリズム）という連鎖が描きだす世界だった。

スミスが生産における合理的秩序を構想する理由もここにあった。生産過程が、国家による奢侈品・貨幣追求のためのシステムの中に取り込まれているかぎり、当時の社会的・政治的問題の本質的な解決は見い出せない。『道徳感情論』からのかれの意図は、それまでは客体としてしか位置づけられていなかった「社会」にたいし、これを主体として描くことにあったが、この

『国富論』冒頭の分業論の叙述は、まさにその延長上にあることがわかる。奢侈品・貨幣により動機づけられている市場を前提にするかぎり、社会は常に国家によって育成され管理されつづける客体でしかない。にもかかわらず現実の市場では次第に奢侈品は日常品化しはじめている。奢侈品に代る新しい言葉が必要になってきていた。それゆえスミスは、富を必需品・便益品とすることによって、奢侈品・貨幣の呪縛から自由になり、必需品・便益品生産のネットワークとしての分業を前面に押しだしてきたのだといえる。だからかれの論理展開のなかでは、企業内分業より社会的分業の方が親概念であることは当然だったし、そもそもこの両者の概念的区別は初めから考えられてもいなかった。そしてこの展開にしたがうかぎり、分業による生産力の増大を前提として、市場は必要物の交換というところで押えられるし、労働の motivation の問題も解決済みとすることが可能だったのである。

スミスが、第1編の冒頭の三つの章で分業論を扱うさいに、市場の問題をそれとして扱うのを避け、必要物の交換の場としての商業社会としてこれを構想していた理由は、以上のような文脈で理解されると思う。先にわたしは、スミスの経済学を「貨幣隠しの経済学」というように呼んだが、この分業論の展開こそは、まさに貨幣隠しのための序章ということができる。

(2) 貨幣論

スミスの貨幣論は、分業論と価値論のあいだに置かれた短い第4章「貨幣の起源と使用について」で述べられる。しかしこれだけではおよそ貨幣論というようには言いにくい。概してスミスには貨幣論がないというのが一般的な評価だろう。スミスはここ以外でも、例えば第2編の流動資本のなかなどで、貨幣について触れてはいる。ただ『国富論』の中にバラまかれた断片的な貨幣についての叙述をまとめて提示するには今はまだ時期尚早といわねばならない。それについては適当な時まで待つことにして、ここでは、第1編第4章についてだけ見てみよう。

ここでスミスが規定する貨幣は、交換手段としての貨幣だけである。かれは『グラスゴー大学講義』のなかでは、まず価値の尺度としての貨幣について述べ、次いで交換手段としての貨幣について述べていたが、ここでは価値

の尺度としての貨幣については一切触れずに、ただ交換手段としての貨幣についてだけ述べている。かれの主張はこうなる。特定の必要物の生産に特化してしまうと、人は誰でも自分の生産物と交換に、自分の生活に必要な種々の物品を獲得しなければならない。しかしたまたま相手が望んでいるものが自分の生産物である場合はいいが、そうでない場合はたちまち交換は不可能になる。その上両者が望んでいるものが互いに一致して交換されるとしても、それぞれの量の一致はやはり困難をとまなう。こうしてこの不便を解消するために貨幣が導入される。「分業が最初に確立されてから、社会のあらゆる時代のあらゆる慎慮ある人々は、自分自身の勤労に特有な生産物のほかに、なにかある商品の一定量、すなわち、たいていの人とはそれとかれらの勤労の生産物とを交換するのを拒むまいとかれが考えるような、なにかある商品の一定量を、いつでも自分の手もとに持っているという仕方、自分が当面する問題を処理しようと努力したにちがいないのである。」(p. 94)

そしてスミスは、その目的のために人々が考えだしてきた物として、家畜、塩、貝がら、乾燥したタラ、たばこ、砂糖、生皮またはなめし皮、そして釘などを挙げ、最終的に、耐久的でどのようにでも分割可能なものである貴金属にそれが落ちていったと述べるのである。しかし果たしてこのようなことが本当に言えるのだろうか。論理的に考えてもこうした叙述は疑問である。交換手段としての貨幣がまだないところで、なぜ分業が確立しうるのだろうか。そのようなところでは、誰もが自分の生活必需品の殆どすべてを自分で作らなければたちまち生きていけなくなるのは当然だろう。そのようなところでまず分業が確立するなどということは、理屈の上からも殆ど不可能なことである。逆に、交換手段としての貨幣が十分に浸透しているところでは、分業が確立することも可能になる。歴史的に考えてみても、貨幣の存在は遙か昔にまでさかのぼって検証することができる。しかしそのような古代の貨幣が交換手段だったかどうかは、まだ判然とはしないが……。貨幣についての歴史的な考察については、(経済)人類学的なアプローチにより種々の問題が提起されているので、ここではそれについての叙述は割愛する。(例えばカール・ポランニーの『人間の経済』等を参照)

スミスの叙述は、たしかに現実の市場の存在やそれを内容として発展して

きた歴史的時間を考慮に入れば、矛盾した表現に満ちていると言わねばならない。だからこそスミスは市場の問題を隠して叙述を進めたのであり、また現実の歴史的時間ではなく、人間本性の展開としての時間の設定を考えていたといえる。言いかえればここで提起されている分業社会というのは決して現実の歴史的時間のなかで構想されたものではなく、かれの意図にそって人間の本性を原理としてその上に演繹されてきた論理的構築物といわねばならない。そしてかれの特徴は、この論理的に構成された世界をあたかも歴史的産物でもあるかのように歴史的叙述のなかで提示して見せることにある。かれの意図は、別にかれの目の前にある社会をあるがままに捉えるなどということではない。かれとしても今見てきたような貨幣の起源について、それが現実だなどとは考えてはいなかっただろう。かれが求めているのは、そうした現実の時間を支配している世界に対して、それに対する有効な対抗概念を作り出すことだった。人間本性—分業—必要物の交換—その手段としての貨幣という連鎖によって、既成の時間の枠から出ることこそが、ここで目指されていることだった。スミスの叙述の中に現われる論理的矛盾の多くは、こうしたかれ特有な時間概念によって引き起こされているといえる。かれにとっては、既成の歴史的時間の流れの中に、それまでとは異なるものを詰め込むことによってそこに新しい歴史の方向を模索していたといえる。

ここでのスミスの展開に従うかぎり、貨幣はたんに交換手段として、しかも必要物生産のために特化した分業社会での生産物の交換手段として、いわば分業社会の「結果」として登場してくる。スミスの意図はここにある。この範囲内で考えられるかぎり、貨幣にたいしては分業社会の維持という性格以外の何物も付け加えられない。人間の中にある交換を望む本性から分業が生じ、それをヨリ一層円滑に動かしていくためののみ貨幣存在は考えられている。ここにはロックやマンドヴィルさらにはスチュアートの貨幣そのものの独自の「力」あるいは「存在理由」は見い出せない。それ以前の社会体制の要ともいふべき位置に置かれていた貨幣存在が、このスミスの叙述のなかでは全く付属的なものとして描かれることになったのである。逆説的ではあるが、これは貨幣についての画期的な規定の仕方

といってもいいかもしれない。

スミスによって社会体制の王座の地位を追われた貨幣は、たしかに一度はその屈辱に甘んじて歴史の表舞台から姿を消すことになる。それはスミスの論理を内蔵させられた新しい時間概念が、分業に関わる新しい生活のエネルギーの発現としてまさに現実の歴史的時間を自己のものとしていくことになったからだった。だが更に先まわりしてみるなら、これも皮肉なことにその新しく解放された生産のエネルギーが自己の一層の展開として用意した産業革命は、その思惑とは裏腹に再び貨幣の社会的復権を用意しはじめることになってしまう。19世紀前半の各国の産業革命の進展とともに、それら各地で現われてくるいわゆる社会主義——空想的も科学的も——に共通することは、貨幣に対する憎悪とスミスのな世界（分業社会での必要物の交換の世界）への憧れということができる。ということはすでにこの時代において再び貨幣の復権という事態が進行し始めていたことを想像させる。

スミスの貨幣論は、少なくともこの第4章に見られるかぎりでは、まだまだいわゆる貨幣論的な叙述にはなっていない。しかし見方を換えればこれは新しい貨幣論への出発、いわば「負の貨幣論」への出発でもあった。それではスミスに従ってこの貨幣論につづく価値論・価格論にはいってこよう。

上でわたしは価値論・価格論というように書いたが、本来なら価値論と価格論とは異質なものである。しかしスミスのなかでは、価値と価格との厳密な区別はない。今までの分業論や貨幣論の叙述の中で繰り返し述べてきたように、スミスのなかでは、現実の市場の問題はまだこの時点では扱われてはいない。にもかかわらず必要物の交換手段として貨幣が登場してきた以上、それら必要物の間での適正な交換基準が必要になってくる。もし市場の問題を扱っていたのなら、価格決定の問題は、まさに市場における最重要の問題として出てくることになるが、スミスの場合には、最初からその道は拒否されている。市場の問題を抜きにして、しかも貨幣によって実現される必要物の適正な交換基準を考えようとするとき、それゆえ、そこに用意されたのが価値という概念だといえる。スミスが、交換価値を実質価格と呼んだりするのも、この前提のもとでは容易に理解される。要するにスミスにおいては、たとへそこにいわゆる市場が成立していなくても、分業社会においても必要

品の交換は不可欠なのだから、その必要物に固有な交換基準を考える必要があったのである。とすれば、それはおのずと生産過程から導き出される基準でしかない。それが交換価値あるいは相対価値と呼ばれるものである。以下節を改めてこれについて見ていこう。

スミスはこの貨幣章の終りのところで、価値論についての予告を次のように行なっている。まずそれから見ていこう。

「諸商品の交換を規制する諸原理を究明するために、私は、

第一に、この交換価値の実質的尺度とはどのようなものであるか、すなわち、すべての商品の実質価格はどのようなものか、ということ明らかにしようとなつて努力するつもりである。

第二に、この実質価格は、どのような様々な部分から構成されているか、つまり成り立っているか、ということ明らかにしようとなつて努力するつもりである。

そして最後に、価格のこれらの様々の部分のあるものあるいはすべてのものを、時には自然率または通常率以上に高め、また時にはそれ以下に引き下げる様々の事情はどのようなものであるか、すなわち、市場価格、言い換えれば諸商品の実際価格が、それらの商品の自然価格と呼ばれるものと正確に一致するのを妨げる様々の原因はどのようなものであるか、ということ明らかにしようとなつて努力するつもりである。」(p. 103)

そしてスミスは、これら三つの問題について、この第1編の第5章・第6章・第7章で個々に詳述していくのである。ここでもできるだけスミスについていきながら、価値論というものが経済学の中で占める位置といったところまで、できれば考えていこうと思う。

〔II〕 価値論と価格論

スミスの価値論と価格論とが扱われるのは、この第1編の第5章・第6章・第7章の三つの章においてである。そしてこれらに続けて第8章から第1編の終章である第11章までで扱われているのは、いわゆる現実の市場の問題である。第1章から第4章までが分業論・貨幣論を中心にした叙述であり、第8章以降が市場の問題であるということは、その中間に位置する第5・6・7

章の三つの章に対するある種の予想を可能にしてくれる。これら三つの章は、分業社会における必要物の生産と交換というスミスにとっての形而上学的な世界が、現実の市場の中に浮上してこようとするときの、そのきわめて重要なステップとして位置づけられている。すなわち、これら三つの章でスミスが意図していたことは、奢侈品・貨幣によってその契機を与えられ、それゆえいつでもその目的のために管理される危険性を残している現実の市場にたいして、スミスがかれの理論的出発点である分業社会のくさびをどのように打ちこむかということだった。だからここではまず最初に、分業から導きだされてくる新しい市場のあり方を構想するという作業が、価値というものの規定をとおして行なわれ、次いでそのような市場においては必要物たる労働生産物＝商品が、既成の秩序ではなく新しい秩序を生み出していくということが、価値（価格）を構成する三つの階級の所得の問題を介して語られ、最後にはそうした新しい自然的秩序としての市場が、現実の市場と出会いながら自己を実現していく過程が、自然価格と市場価格という言葉をもって語られることになるのである。そしてここでの展開が終ったところで、現実の市場を問題にし、その上で第2編の資本論へと進むことが可能になる。第8章以降の話はさておくとして、では具体的に第5章から順に見ていくことにしよう。

(1) 価値と価格

この5章のタイトルは、「諸商品の実質価格(real price)と名目価格(nominal price)について、すなわち、それらの労働価格(price in labour)と貨幣価格(price in money)について」というものである。たしかにここでは価格という言葉がつかわれていて、現実の市場の問題がプロパーに扱われているかのようにも見える。しかし、諸商品の本当の価格(real price)は労働で測られた価格(price in labour)であると言い、これにたいしていわゆる市場における価格・貨幣で表明された価格は名目的なものにすぎないというとき、そこにははやくも二つの市場の存在が暗示されている。だからここでのスミスの課題は、こうした二つの価格を問題にすることによって、現実の市場とスミスの分業社会（商業社会）との関係を、後者の論理の主

導のもとに整理することだったといえよう。

かれのこの章の書き出しの二つのパラグラフを引用してみよう。

「あらゆる人は、その人が人間生活の必需品・便益品および娯楽品をどの程度に享受できるかに応じて、富んでいたり貧しかったりするのである。ところでいったん分業が徹底して行なわれると、一人の人間が自分自身の労働で充足し得るのは、これらのうちのごく小さな部分に過ぎない。彼はその圧倒的大部分を他の人々の労働から引き出さねばならないのであって、彼は、自分が支配しうる労働の量、つまり自分が購買できる労働の量に応じて、富んでいたり、貧しかったりせざるをえない。したがって、ある商品の価値は、それを所有してはいても自分自身では使用または消費しようとは思わず、それを他の諸商品と交換しようと思っている人には、その商品がその人に購買または支配させうる労働の量に等しい。それゆえ、労働は一切の商品の交換価値の実質的尺度である。

「あらゆるものの実質価格、つまりあらゆるものがそれを獲得しようと欲する人に現実に費やさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞である。それを獲得して売りさばいたり、他のものと交換したりしようとする人にとって、あらゆるものが現実にどれほどの値いがあるかといえば、それはこのものがその人自身に節約させうる労苦や煩勞であり、またこのものが他の人々に課しうる労苦や煩勞である。貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得しうるものとまったく同様に、労働によって購買されるのである。……労働こそは、最初の 価格、つまり一切のものに支払われた本源的な購買貨幣であった。世界の一切の富が最初に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってであって、富を所有している人々、またそれをある新しい生産物と交換しようとする人々にとってのその価値は、それがそういう人々に購買または支配させうる労働の量に正確に等しいのである。」(pp. 105-106)

スミスは、この初めのパラグラフにおいて、分業が前提されるなら、そこで生活する人間は、他人の労働生産物(すなわちここでは商品)と自分のそれとを交換しないことには、自分の生活を維持し再生産していくことが出来ないとした上で、自分の労働生産物は、それが交換において支配する他人の労働の

量によって、その価値が規定されると述べている。これがスミスの「支配労働」と言われるものの最初の規定ということができる。自分の商品にたいする価値の尺度・物差しとして、その商品が支配できる他人の労働の量が出されたのは、それまでにはなかったスミスに独自なところである。またスミスは、上の二番目の引用文において、商品の実質価格、言いかえればその商品の価値の源泉といわれるものを、今度は、その商品を作り出すために要した「労苦や煩勞」(toil and trouble)によって説明している。これがいわゆる「投下労働」と言われるものである。支配労働と投下労働というのは、少なくともここで言われているところだけで考えるかぎり、別に相互に矛盾しあうものではない。ここでスミスが問題にしているのは、きわめて単純である。すなわち市場に存在している諸商品は、すべて労働の生産物——分業社会なのだから——であり、それらの商品の中に対象化されている「労働」こそが商品の本当の価格(=労働で測られた価格)=価値だということである。

たしかにスミスが言うような分業社会を前提とするかぎり、そしてそれをストレートに「市場」へと上向させるかぎり、上の主張はそれとして一貫している。かれが支配労働という他人の労働を介して投下労働を問題にするというのも、次ぎのように考えられる。すなわち、分業社会での各人は、分業すなわち労働の分割のそれぞれの持ち場で働いているわけだが、といってもこれはあくまでも自然発生的な分業であって、初めから全体の構想の中でそれぞれが位置づけられていたわけではない。だからかれらは、そうした自己の部分的労働を全体としての労働の中で不断にしかも客観的に位置づけられねばならないだろう。スミスの構想のなかでそれを果たしてくれるのが、この支配労働という自分の労働が他人の労働のなかで「社会的」に位置づけられることを示す言葉だったのであり、その調整が行なわれる場が「市場」だった。そしてこうした各人にとっての反省の場というのは、スミスが分業概念を出してきたときから当然予定されていたものである。だからそこでの成員は、最初から一人よがりな自己主張は認められてはいなかった。そしてこうした発想は、『道徳感情論』での当事者の感情と社会的共感との関係と同じである。

スミスの支配労働という考え方で注意されねばならないことは、この時代には、まだ生産・労働というものが、それだけではまだけって合理的な秩序をもっていなかったということである。もし生産とか労働とかというものが合理的に秩序づけられているとしたなら、スミスは別に支配労働などという回り道をして投下労働に帰るような手順を踏む必要はない。リカードやマルクスがやったように投下労働を単純に時間で計算するだけで「価値」を導きだせるような、そうした生産・労働の秩序は、まだスミスの時代にはなかった。だからこそスミスは、「市場」の合理性によって生産・労働の合理性を導きだそうとして、支配労働から投下労働という回り道をとったのだといえる。

今わたしは、「市場」の合理性という言葉を用いたが、しかし、これも正確ではない。ここでの市場はあくまでもカッコつきの「市場」であって、現実にある市場のことでは勿論ない。少なくともスミスのここまでの展開を見ていると、現実の市場がそれほど合理的であるなどということはどこにも出てこない。逆にかねは現実の市場の問題を全部隠して、今までの議論を進めてきた。そして今それが初めて出てきたと思うと、それはすでにきわめて合理的な「市場」として考えられている。スミスがここで考えているのは、貨幣・金によって支配され、だれもがその貨幣・金を求めて奔走しているような現実の市場のなかに、分業という労働によって支配される「市場」の足がかりを築くことにあった。金の追求ではない労働の追求、あるいは金や貨幣を基準にした市場ではなく、労働や労働生産物を基準にした「市場」を浸透させていくことこそが目指されていた。だからこそスミスは、こうした構想が現実化されるのにもなう困難さについては十分承知していたともいえる。かねは次のように言う。

「しかしながら、たとえ労働は一切の商品の交換価値の実質的尺度であっても、商品の価値が普通評価されるのはそれによってではない。二つの異なる労働量のあいだの割り合いを確定することはしばしば困難である。二つの異なる部類の仕事に費やされた時間だけでは必ずしも常にこの割り合いを決定しないであろう。耐えしのばれた辛苦、または働かされた創意の様々な度合いもまた、同時に計算に入れられなければならない。……(けれども)辛

苦または創意のいずれかについて、ある正確な尺度を発見するのはたやすいことではない。実際のところ、様々な部類の労働の様々な生産物が交換される場合には、両者にたいして多少とも斟酌されるのが普通である。とはいえ、それはある正確な尺度によってではなく、たとえ正確ではないにしても、日常生活の仕事を進めていくには十分であるような、大づかみな等式にしたがいが、市場のかけひきや値切りによって調節されているのである。」(p. 107)

ここでかれの言う「市場のかけひきやねざり」(the higgling and bargaining of the market) というのは、厳密に考えれば、現実の市場での貨幣や金を求めてのそれを指しているのではないだろう。ここでの市場とは、まだあくまでも労働すなわち必要物生産のために各自が受け持っている社会的分業の一環としての労働がたがいにreasonableな対話を行なうところに生じてくる「市場」のことだろう。スミスは、自分の構想する世界の困難さを知ると同時に、そこに働く各人の自己愛と社会愛(仁恵の美德)にたいしてここでも大きな信頼を寄せているのかも知れない。というのも、かれの構想する「市場」が現実の市場の中に上向してくるのはまさにここからだからである。

スミスは、たしかに、先の引用文で自分の構想する「市場」の正当性を述べたが、すぐそれにつづくパラグラフからは一転して現実の市場の問題——といってもまだきわめて原則的ではあるが——へと入っていく。名目価格・貨幣価格の登場である。かれに言わせると、労働こそがすべての基準だとはいえ、現実には個々の商品が労働でたがいに交換されることは困難をとまなうし、それらが貨幣と交換されるほうが自然だというのである。「しかしながら、物々交換が終りをつけ、貨幣が商業の共通の用具になると、あらゆる個々の商品は、ある他の商品と交換されるよりも、しばしば貨幣と交換される」(p. 108)。今ここに出てきた貨幣は、先に交換の手段として出されていたものとは違う。いわゆる価値尺度としての貨幣というものである。ただスミス自身は、貨幣の価値尺度機能にたいしてはそれほど大きな意味を与えてはいない。なぜなら価値尺度としての貨幣自身が、新しい金鉱の発見とか貨幣の改鋳あるいは摩滅があれば変動してしまうし、これでは本当の意味での尺度とは言えない。だからスミス自身、本当の意味での価値の尺度は、労働——こ

れは人間というものに大きな変化がないのだから——だというのである。「それ自体の価値がけっして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによって一切の商品の価値が評価され、また比較されうる、究極の、しかも実質的な標準 (real standard) である」(p. 109)。

たしかにここでスミスは価値尺度としての貨幣が働いている現実の市場まで上向してきたことはきた。しかしこの上向は、現実社会のいわば第二の「理念化」のための上向であったことが分かる。すなわち、かれは現実の市場であらゆる商品にたいして事実上の価値尺度として振るまっている貨幣にたいして、これを分業社会の論理で再構成し、それを労働で測られる価格にたいする「名目的」な価格として叙述してみせたのである。もっとも、システムを嫌うスミスは、だからといって現実の市場を否定してしまうようなことはしない。たとえ名目価格とされたとはいえ、貨幣価格は、遠隔地間の交易にさいしては、スミスのなかでも、唯一の尺度でありつづけている。(これは、スミスの中での二つの市場の存在を示している)。その上、貨幣で表示される価格を名目価格と規定できた以上、現実の日常的な取引においてそれを規制しているのが貨幣であるとしても、それを否定する理由もないと述べるのである。こうしたスミスの試みは、一言で言ってしまうと、貨幣を中心に動いている市場を労働を中心にした市場として「読み換え」ていく作業だったとも言えるだろう。

この第5章の価値論において重要なことは、必要物生産のための分業社会では、どのような商品も、それらはすべて労働生産物であるのだから、それが「市場」で支配する労働によって測られるのが本当の価格 (real price) なのだ、ということにつきるだろう。そして現実に存在している貨幣を基準とする市場は、それを前提としたときに初めてその存在理由が与えられることになるのである。

こうしたスミスの展開の中で、上では触れてはこなかったが、人間の労働生産物が「商品」として掴まえられてきていることも注意しておく必要がある。ここでは労働生産物と商品とを区別するものはなにもない。人間の本性に基づく分業論からの展開のなかで、価値論・価格論へと進むにつれ、労働生産物は「商品」として捉えられ叙述されることになってしまった。スミス

の中ではまだ、商品形態は人間本性にとって自然なものでありえたが、マルクスの時代になってくると、労働生産物と商品形態とは区別され、商品生産から自由になった「労働」のイメージが広げられる。しかし現代はさらに、こうした「労働」概念さえも「人間」から区別されようとしている。

(2) 価値（価格）の構成と所得

第6章のタイトルは、「諸商品の価格の構成部分について」というものである。スミスは第5章で市場を労働を基準にして捉える方向を打ち出したが、ここでは、その労働に対する現実の種々の階級の関わり方とでもいうものが、商品の価格の構成というものから考えられていく。そしてそこに、労働を土台とした新しい社会秩序が構想されることになる。前章での叙述にしたがうなら、分業社会の成員はすべて社会的労働の担い手として市場に登場して自分の労働生産物を交換しようとする。しかしスミスが生活した現実の社会においても種々の階級の人々がいる。労働者はもちろん多いだろうが、資本家や地主や貴族もいる。では労働者以外の人々はどのような形でこの労働が支配している市場に入りこむことになるのだろうか。スミスのなかでは、たとえ生産様式に種々の変化があろうとも、それらの変化にもかかわらず労働をその基準とする市場・商業社会の原則が貫かれていくことを整合的に説明する必要があった。そしてスミスが価格の構成というところで問題にするのはこのことである。かれはこの説明を、一見、歴史的叙述に依ったような方法で行なおうとする。初めに初期未開社会、ついで資財の蓄積が進んでいる社会、そして最後に土地の私有までも進んでいる社会という順で、これは説明されていく。以下しばらくスミスにしたがって見ていこう。

(a) 初期未開社会 (early and rude state of society)

「資材の蓄積と土地の占有との双方に先行する社会の初期未開状態のもとでは、さまざまなものを獲得するために必要な労働量のあいだの割り合いが、これらのものをたがいに交換するためのある基準になりうる唯一の事情であるように思われる。……

「こういう事態のもとでは、労働の全生産物は労働者に属し、またある商

品の獲得または生産に普通雇傭される労働量は、その商品が普通購買し、支配し、またはこれと交換されるべき労働量を規制しうる唯一の事情である。」(pp. 131-132)

スミスのここでいう初期未開社会というのは、なにかロックなどの自然状態の社会のようにも思える。たしかにスミスにとっても、この状態はやはり現実の社会を演繹するための原社会としての意味は十分もっているといえる。しかしこうした状態は、スミスが第5章で述べていた世界とどこが違うのだろうか。労働を唯一その基準とする市場と今ここでかれが言う初期未開社会との間には、原理的な違いはない。ここではすべての人間が自己の労働によって生活しているのだから、労働以外の要素はどこにも入ってはこない。だからそこで互いに労働生産物を交換し合うにしても、それぞれが支配する労働量と自分が投下した労働量とはピタリと一致しているし、労働の全生産物も労働者だけのものである。ここに関するかぎり、第5章の価値論で述べられていたことは、なんの留保条件も付けずに、そのまま適用可能である。しかし、人類の状態はいつまでもこの状態にとどまっているわけではない。資材も蓄積されれば土地の私有化も進み、生産様式も変化していく。その中で、価値論はどのように維持され、あるいは変更を蒙るのだろうか。

(b) 資材の蓄積が始まると

「資材が個々人の手に蓄積されるや否や、彼らのなかのあるものは、勤勉な人々を就業させるために当然それを使用し、彼らの所産を売ることによって、すなわち彼らの労働が原料の価値に付加するものによって利潤をあげるために、彼らに原料や生活資料を供給しようとする。その完成品を貨幣またはそのほかの財貨のいずれかと交換する場合には、こういう冒険に自分の財貨をあえて投じるこの事業の企業家にも、その利潤として、原料の価値や職人の賃金を支払うに足りるものを越えるなにかが与えられなければならない。それゆえ、職人たちが原料に付加する価値は、この場合二つの部分に分割されるのであって、その一つは彼らの賃金を支払い、他は雇い主が前払いした原料と賃金との全資材にたいする利潤を支払うのである。雇い主が職人たちの所産を売却することによって、自分の資財を回収するに足りる以上の何も

のかを予期できぬかぎり、彼はかれらを雇傭するのになんの興味ももてぬはずであるし、またかれの利潤がかれの資財の大きさに対してある比例をもたぬ限り、かれは小資財よりもむしろ大資財を使用するのになんの興味ももてぬはずである」(p. 132)

「この資本の所有者は、このようにしてほとんど一切の労働を免除されているにもかかわらず、なお自分の利潤は自分の資本にたいして規則的な比例を保つはずだ、ということを期待している。それゆえ、諸商品の価格においては、資財の利潤は、労働の賃金とまったく異なる構成部分をなし、まったく異なる諸原理によって規制されているのである」(p. 133)

長い引用になってしまったが、ここで言われていることは、経済学的に考えてもきわめて理論的なものともいえる。資本が蓄積され、そのもとで労働者が働くことになると、労働者はかれらが作るもののなかで、自分の賃金部分ばかりでなく、資本の所有者のための利潤をも生産しなければならなくなる。そしてこの利潤部分は、労働者の賃金部分とは全く異なる原理によって規制されることになる。少なくともこのように言われるかぎり、スミスの主張の中には理論的に非難されるところは何もない。それどころか、利潤の成立の根拠を労働から導き出したという点で、かれ以前の理解——特にシュアートの譲渡利潤説——を大きく超えているというようにさえ言える。しかしながらかれが次ぎのように言うとき、問題が出てくる。「こうなると、ある商品の獲得または生産に普通費やされる労働の量は、その商品が普通購買し、支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規制しうる唯一の事情ではない。賃金を前払いし、その労働の原料を提供した資財の利潤にたいしてもまた、当然追加量が支払われなければならないのは明白である」(p. 134)。ここでは、投下労働量と支配労働量とが異なっているということばかりではなく、ある商品が市場で支配する労働量は、その商品を生産するのに費やされた労働者の賃金とそこでの資本家の利潤との二つが市場で支配する、労働の量だということのである。

前の引用文では、ある商品に対象化された労働は、賃金部分と利潤部分とに分解 (resolve) される価値を作り出すということが言われている。とするなら、それをあくまで貫き徹そうとするなら、たとえ二つの部分に分解さ

れるとしても、それらは共にそこに投下された労働によって作りだされたものなのだから、その商品が市場で支配する労働の量は、投下労働によって「唯一」規制されると書くべきだろう。もしそのように書くなら、そこに出てくる投下労働量と支配労働量との違いを、「労働」というものにヨリ内在化することによって整合的に解く方向——例えばマルクスがやったように労働と労働力とを区別するとか——が与えられたかもしれない。しかしスミスはそうは書かなかった。その代りに、スミスの現実感覚は、商品の価値（本当は価格というべきなのだが、ここではスミスに従う）のうちで利潤部分も賃金部分とならんで、市場においてその商品が支配する労働量を決定すると述べてしまったのである。そしてこれは利潤部分ばかりではなかった。土地の地代についても同様なことが述べられる。

(c) 土地の私有が始まると

「ある国の土地がすべて私有財産になるや否や、地主たちは、他のすべての人々と同じように、自分たちが種をまいたこともない所で収穫することを好み、その自然の生産物にたいしてさえ地代を要求する。森や木や、野の草や、大地の一切の自然の果実は、土地が共有だったときには労働者がただこれらを採用する手数をかけさえすればよかったが、いまや彼にとってさえ追加的価格が付いたものになる。いまや彼は、これらを採用するための許可にたいして支払わなければならない。つまり彼は自分の労働が収集または生産したものの一部を地主に引き渡さなければならない。この部分が、またこれと同じことになるが、この部分の価格が、土地の地代を構成し、そしてそれは、大部分の商品の価格における第三の部分（構成部分）を形づくるのである。」(p. 134)

さてスミスは、このように、初期未開社会から資本の蓄積と土地の私有が進んだ社会まで到達したが、注意しなければならないのは、この資本の蓄積にしても土地の私有化にしても、それが何故生じたかということについては、一切触れられていないということである。ただ事実としてまったく無媒介的にこうした新しい事態が導入されているのみである。論理的な記述はおろか

歴史的な記述さえ見出すのは困難である。(第8章の「労働の賃金について」の中でほんの僅かではあるが、歴史的記述のようなものがなされているが……)。ロックの場合には、彼が金銀・貨幣を導入してきたのは、進歩のための蓄積という論理的な必然性をもっていたが、それと比べてもこうしたスミスの叙述は曖昧といえよう。にもかかわらず、彼にとっては、この初期未開社会というのは、労働者が自分自身の労働の全生産物を享受する社会であり、「事物の本源的な状態」(p. 156)と呼ばれ、その上、地代に分解される部分の価値も利潤に分解される部分の価値も、それらがそれぞれに購買または支配する労働の量によって測られると強調する(p. 139)のである。

この第6章で述べられていることから判断するならば、個々の商品の価値は、投下労働によって測られるのではなく、それが市場において購買または支配する労働の量によって測られるのであり(支配労働価値説)、それゆえ賃金・利潤および地代は、すべての交換価値の「三つの本源的な源泉」(p. 139)ということになる(構成価値論)。そしてこれは明らかに、投下労働価値説の放棄というように言っても差し支えないかもしれない。しかしわれわれはすでにスミスの中にある二つの市場の存在について知っている以上、このように安易に判断を下してしまうのは疑問である。既成の市場のみを考える際にはそのように言えるかもしれぬが、それだけでは不十分だろう。以下ではこうしたスミスの主張をもう一度吟味してみよう。

この第6章でのスミスの叙述は、価値論というところから見れば、大きな欠陥を持っているように見えた。投下労働による価値の規定(分解価値論)という主張と支配労働によるそれ(構成価値論)とが混在し、整合的にこれを捉えるのはたしかに困難な作業だといえよう。その上、初期未開社会という範疇にしても、これを歴史的範疇と考えると、分業もまだ発達していないような社会で商品とか価値を問題にしているようで、こんな構想はアナクロニズムだと批判されたりもした。しかし、種々に矛盾しあっているように見えるここでのスミスの叙述も、ここに想定されている二つの市場の存在とかれ独特の時間概念とを前提にすると、それほど否定的にも見えなくなる。

スミスの場合、貨幣や奢侈品を契機に成立してきた現実の市場にたいして、つねに分業社会ともいうべき商業社会が対置されていた。そこでは労働こそ

がすべての基準であり、価値の「究極的でしかも本当の」尺度でもあった。この大前提は、第6章の叙述の中でも生きている。資本の蓄積や土地の私有が進んだ社会においても、そこにおいて作りだされるものは「労働」の所産以外の何物でもない。そしてそこに作りだされた労働生産物が市場に出て商品として動きだすとき、それにたいして与えられる社会的評価は、当該商品が市場において支配する「労働」の量である。この二つの「労働」——生産過程で働いている「労働」と市場において支配される「労働」——は、ハッキリ区別される必要がある。生産過程で働いている「労働」は、孤立した労働から次第に分業を前提とした結合労働へと変化してくる。しかしたとえそれがどのように変化するとしても（かれの場合、資本制的生産様式を人間本性から区別する論理はない）、価値の尺度としての「労働」の方は、——これはスミスが構想する「本来の市場」での話のだが——変化しない。かれのなかでは、「労働の量によるのなら、われわれは、世紀から世紀にかけても、年々についても、最も正確にそれ（商品の価値）を評価することができる」（p. 115）ということになっていた。生産過程では分業が進み、そこで働く「労働」の生産性は飛躍的に増大していく。これは同時に、論理的には、社会的分業の広がりすなわち種々の資本の蓄積や土地の私有（資本制の大規模農業）を結果させていく。だからスミスのなかでは階級社会というのは分業社会として捉えられていく。にもかかわらず、価値の尺度としての「労働」は constant だというのである。もっとも、たとえこのように言ったとしても、理論的にはこのようなことは不可能に見える。その際、価値の尺度としての「労働」というもので、スミスが何を考えているかが問題だろう。これをその「労働」の再生産費あるいは賃金というようなところでだけ考えてみると、たちまちこれは破綻する。そうではなくて、ここでの価値の尺度としての「労働」というのは、変な言い方だが、物理的エネルギーというように考えておく方がスミスの意図に近い。

スミスのなかでは、分業の発達には、生産過程においては孤立した労働に代えて結合労働・有機的な労働を可能にする。そしてそこに集められた労働者が作りだす「力」は、それらの人々が孤立して労働していたときの「力」の単純合計以上のものとして現われる。後にブルードンは、その差に注目して

集合力の理論を考えたが、それはここでのスミスの主張の延長上にある。ある商品の生産のために投下された個々の労働者のバラバラな「力」は、そこで結合され、投下された労働の単純総和以上の「力」を発揮する。だからその商品が市場で支配する「価値の尺度としての労働」の量は、「投下された労働」の量よりも多くなる。これは当然すぎるほど当然なことだろう。後にこの差は、労働力商品の特殊性からくる「不払い労働部分」としてマルクスによって定式化されることになるが、スミスのこうした叙述も、たとえまだ厳密さには欠けるとはいえ、いわゆる分解価値説・投下労働価値説として十分認められる。

さて上のような関係を、各目価格たる貨幣が支配する現実の市場へと上向させてきたらどうなるか。ここにはすでに資本の所有者もいれば土地所有者もいる。イギリスでは、スミスの時代より以前から労働集約型の農業が発達していたことはよく知られている。さらにまたビン・マニュファクチャーの例にもあるような手工業も成長しはじめていた。スミスが上向してくる現実の市場は、かれの目から見ればこうした世界でもある。こうした世界に、かれは、自分が構想する労働を基準とした世界を組み込んでいかねばならない。前にも引用したように、スミスは、資本の所有者にたいして、かれらは「職人たちの所産を売却することによって、自分の資財を回収するに足る以上の何物かを予期できぬかぎり」労働者を雇って事業を興すことはない、という。資本の所有者は、結合労働の組織者であり資財の提供者である。だから彼らは、そこでの労働の生産物にたいして自分の権利を主張できる。事実、かれらは、労働者にたいしてその「価値の尺度」分に見合う賃金を支払ったとしても、現実の市場が分業社会からの上向の結果であるかぎり、十分に余裕をもって自分たちの取り分を確保できる。(繰り返すが、ここで言っているのはあくまでも原理的な話しである。現実には破産する資本家もいれば繁栄していく者もいる。ここでは現実の利潤率に対する議論などが入る論理次元ではないことに注意する必要がある)。土地所有者についても、これについては後で若干付け加えねばならないことが残るが、大筋としては資本の所有者の場合と同様なことが言える。この現実の階級社会に対する原社会としてスミスが設定した初期未開社会というのは、孤立した労働同志の交換の社会で

あると同時に、価値尺度としての労働を再確認するための場としての意味をもっていたと考えられる。そしてこのような方法で捉えられるがゆえに、この階級社会は、スミスにとっては、分業の発展した社会（社会的分業）として再構成されていく。かれが、企業内分業と社会的分業との区別をつけないことの積極的な意味は、こうしたところにも現われていた。そのなかで、かれの価値論は資本蓄積と土地の私有化という現実の社会へ上向してきた。だから土地の私有と資財の蓄積のもとで生産される商品は、そこでの労働者たちに、それぞれの「力」——これは尺度としてはconstant——に見合う賃金を支払った上に、資本家の利潤と地主の地代とを保証することになるのである。これは一見、そこでの商品の価格が、賃金・利潤・地代によって構成されるいわゆる構成価格、さらには構成価値として捉えられるかもしれないが、しかし今までの叙述から考えられるように、そのようには言えない。

スミスのここまでの叙述では、まだ現実の市場というのは、全く原理的に、名目価格としての貨幣が機能している場という規定以上のものは与えられてはいない。ということは、ここでは商品の価格について述べられるにしても、それはあくまでも実質価格たる労働で測られたものの貨幣表現という以上のことは何も言うことができないはずである。そしてその限りで考えれば、かれの主張はきわめて整合的に分解価値説で一貫している。これが誤解を呼ぶ理由は、ここでのスミスの市場の議論を短絡的に現実的な価格決定と結びつけてしまうことにあったように思われる。後にマルサスは、この面を強調することにより投下労働価値説を排除しようとしたが、それなどは、こうした「誤読」の典型だといえるだろう。

スミスが、初期未開社会という労働を基準にして営まれる原社会を想定し、その上に全く無媒介的に資本の蓄積と土地の私有とを重ねていったことも忘れてはならない。そこには市場の話しなどは何一つ言われてはいなかった。だからかれの初期未開社会を歴史のカテゴリーとして捉えるなどということは全く無意味だろう。かれの場合には、前にも述べたように、商品形態と労働生産物一般との区別はない。それどころかかれの意図は、この両者を一緒にすることの方であった。かれの展開は、必要物・便益品としての労働生産物がたがいに交換されるというところにその叙述を限定したところで初めて、

可能になっている。それゆえかれが現実の社会を再構成するための原社会として構想する論理的モデルは、かれのいう初期未開社会以外にはなかっただろう。初期未開社会とはこのようなものだったと考えられる。だからこそスミスは、その原社会の延長上に、結合労働が支配している分業社会を構想できたのだろう。なぜならここでなら市場というのは、必要物の交換の場として、いわば生産の社会的秩序を現わすものと言えたからである。

スミスの初期未開社会の設定に種々に誤解を生むような曖昧さがあることは否定しない。しかしあらかじめ定められた歴史記述にしたがって、スミスの構想する世界を資本制的社会としてだけ捉え、それを前提にした時間座標を用いてそれに先行する社会までも勝手に組み立ててしまうのは疑問である。かれの場合には、かれが構想する社会は、既成のそれに先立つ歴史的時間の中から生れてくるのではなかった。だからこうしたスミスの社会に先行する社会を、独立小生産者の社会であるとか単純商品社会とかと置き換えてみることに、それほど意味は認められない。逆にわれわれがしなければならないのは、未開社会から資本の蓄積と土地の私有へと無媒介的に上向してくる「時間」のなかに、既成の時間とは異なるスミス独自の「時間」が働いているのを読み取ることだろう。スミスは少なくとも、この二つの社会の間に質的な違いを導入するような時間からは、自由であった。かれにとってそれは具体的には、分業社会の強力な生産力をその内容・力とする「時間」のことであった。ここではきわめて原理的にのみ扱われていたこのかれ独自の「時間」の概念は、後に第3編で「歴史的」に展開・叙述されていくことになる。

第6章での価値と価格についてのスミスの主張を見てきたが、それは予想以上に論理的なものだといえる。そしてここでの展開にしたがうとき、そこには生産にもとづく新しい社会的秩序が生まれようとしている。労働はすべての富の源であり、分業労働・結合労働は、労働者ばかりでなく、その社会に生活している資本家や地主の所得をも実現していく性格のものであった。そしてこれは「商品」の価値・労働価格のなかに刻みこまれている。だからこうした「力」を内蔵した商品のための市場が現実の市場となるならば、そこでの種々の階級はそれぞれに、生産にもとづく所有を獲得することになる。

構成価格論というのは、それぞれの階級の所得を、市場における商品の価格決定のプロセスから出発して、そこから生産過程へとさか上って規定していく発想だろう。そこでは、市場の問題こそ、最初に取り上げられしかも最重要の問題となる。だがスミスのここまでの叙述に関するかぎり、かれの市場についての叙述はあくまでも原理的なところにとどまっていた。にもかかわらずこれを構成価値論というように呼ぶのは、それゆえ、当を得た評価ではない。かれの価値論は、未成熟なところを多く残すとはいえ、分解価値論として理解されるべきものである。投下労働と支配労働との関係にしても、スミスのなかでは、結合労働と孤立した労働、あるいは分業にもとづく新しい生産様式のもとの拡大された労働のエネルギーともかかわらず大きな変化があるはずのない一人一人の労働者のエネルギー(価値尺度としての労働)との関係というように理解されるものだろう。そしてこれは、労働と労働力というような区別でこそないにしても、剰余価値生産の根拠を考えるための重要な一つのステップといえる。もちろんスミスにしてみれば、結合労働・分業が問題であって、それが資本制のかどうかというようなことは、少なくともここでは問題にはなっていないのだが……

〔Ⅲ〕 自然価格と市場価格

さていよいよスミスの上向の過程は、現実の市場のレベルまで登ってくる。既成の富・貨幣・市場というものをことごとく裏側に隠して展開されてきたかれの論理が、今ようやく、既成の秩序の中でも最も強力な存在といえる市場へと浮上してきたのである。ここに至るまでに、スミスの武器庫にはすでに多くのものが詰め込まれてきた。必要品・便益品あるいは分業の生産力とその有機的・結合労働、さらには価値とその尺度としての労働というように、種々の言葉が、かれの独自の構想のなかで位置づけられてきた。そしてかれのこうした構想を支えているものを、あえて一言で表現しようとすれば、抽象的で漠然とした表現かもしれないが、それは生産の力に依拠した秩序とでもいうことができるかもしれない。これは価値と価格とを扱っていた第6章の最後のパラグラフに象徴的に表現されている。かれは次のように言う。

「文明国では、その交換価値が労働だけから生じる商品はわずかしがなく、地代と利潤が圧倒的の大部分の商品の交換価値に大いに寄与するから、その国の労働の年々の生産物も、それを産出し、調整し、またその生産物を市場へもたらすのに雇傭された労働よりも、はるかに多くの労働量をつねに購買または支配するに足りるであろう。もしこの社会が、年々に購買しうる一切の労働を雇傭するとすれば、労働量は毎年大いに増加するだろうから、後続する毎年の生産物は先行する毎年のそれよりも非常に大きな価値のものになるであろう。けれども、年々の全生産物が勤勉な人々を扶養するために使用される国などは一つもない。いたるところで、怠け者がその一大部分を消費するのであって、この全生産物がこれらの二つの異なる階級の人々のあいだに年々に分割される様々の割合に応じて、この全生産物の通常的または平均的な価値は、年々に増加するか、または減少するか、あるいは連年引き続き同じか、そのいずれかに違わないのである。」(p. 142)

この文章はきわめて意味深長である。分業も発達していないような未開社会とは異なり、スミスが生活している文明社会では、すべての商品は分業の結果として現われる。ということは、スミスのこれまでの展開にしたがうかぎり、それらの商品が支配する労働量は、それらの生産に投下された労働の量よりも多くなる。スミスにとっては、近代文明社会というのは、分業が発達した社会（ちなみにかれにとっての歴史的進歩の基準はこの分業の発達の度合いとすることができる）として捉えられるのだから、そこでは企業内分業も社会的分業もともに広くゆきわたっている。だからそこで生産された商品が、もし生産的に消費されたとするなら、それはヨリ一層多くの労働者を生産過程に吸収し、その結果そこに新たに生産される商品の量を一層拡大された規模で再生産していくことになる。そしてこれは原理的には、社会の無限の進歩を保証してくれる。労働の motivation と社会の進歩という二つの課題を、重商主義的な paradigm から解放し新たな枠組で構想してみせるといふ、分業論以来のスミスの課題は、ようやくこうして「生産」を「拡大再生産」として定式化する方向で組み立てられようとしている。

しかしスミスも言うように、たとえ理論的には社会の無限の進歩が言えるようになったとしても、現実の社会はそれほど都合よく動いているわけでは

ない。本来生産のためのファンドとしてあるものの大部分を「怠け者」たちが消費してしまっている。その結果、その消費があまりにはなはだしい場合には、社会全体としては衰退への道を歩むことになりかねない。たしかに、スミスだけを見ているかぎり、これは妥当な主張だろう。だがすでに何度も見てきたように、こうした主張は、マンドヴィルやスチュアートの世界とは真向から対立する。かれらは、貴人の奢侈・消費こそが社会を進歩させていくものとして考えていた。それなのにスミスは、これを「怠け者」の消費として退けてしまったのである。だからこのスミスの主張は、大袈裟に言えば、既成の重商主義的な考え方に対する宣戦布告のようなものだった。スミスは、生産・分業というところに依拠して、そこでの理論武装をすませ、これからいよいよ既成の「市場」概念を突き崩していく戦いを始めようとしている。その戦いはまず商品の価格についての規定から始まる。かれはこの第7章の「諸商品の自然価格と市場価格について」を、以下のように始める。

「あらゆる社会またはその近隣には、労働や資材の様々な用途ごとに、賃金と利潤との双方についての通常率または平均率(an ordinary or average rate) というものがある。……この率は、一部はその社会の一般的諸事情、つまりその貧富、その進歩、停滞または衰退の状態によって、また一部は各々の用途の特殊な性質によって、自然に規制されるのである。

「また同様に、あらゆる社会またはその近隣には、地代の通常率または平均率というものがある。……この率もまた、一部はその土地が位置する社会またはその近隣の一般的諸事情によって、また一部はその自然的または改良された多産性によって、規制されるのである。

「これらの通常率または平均率は、それらが普通広く行なわれている時と所での、賃金・利潤および地代の自然率と呼んでも差し支えなからう。

「ある商品の価格が、それを産出し、調整し、またそれを市場にもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃金と、資材の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がない場合、この時その商品は、その自然価格と呼んでも差し支えないもので売られるのである。」(pp. 143-144)

しかし、現実の市場においては、必ずしも個々の商品はこの自然価格のとおり売られたり買われたりするわけではない。スミスのなかでも、個々の商品の現実に売り買いされる価格は市場価格と呼ばれ、これは市場における有効需要により決定されていく。価格という、それ自体きわめて現実的なものにたいして、ここでスミスがわざわざ自然価格などという言葉で対置していることに、まず注意しておく必要があるだろう。スミスの自然価格という概念はたしかに、生産価格（費用価格+平均利潤）として理解することは十分可能なものではある。スミスのばあい、資本と労働（力）の自由な移動が想定されているし、異種生産部門間での個々の利潤率の測定こそこの段階では困難であるかも知れないが——スミスには、資本の有機的構成という概念は勿論ない——、総資本と総剰余価値については、総資本と総利潤という形をとおしてその概要を捉えることも可能だろう。だから、彼が利潤率について、これをほぼ利率の2倍ぐらいとして考えていることから、その利潤率を平均（一般的）利潤率というように理解し、ここで提起されている自然価格を費用価格+平均利潤すなわち生産価格というように理解することは許されるとおもう。そして彼が、この自然価格をして市場価格がそこへと引き寄せられていく中心価格だということも整合的に上のことに適合する。

だが、スミスにとって、この自然価格という言葉が持っている意味はそれだけではすまない。ここで問題になっているのは、スミスの商品にとって、「価格」とは何か、あるいは「市場」とはどのような意味をもつのか、ということだといえる。スミスにとって商品というのは、基本的には、必需品・便益品として表現される有用物のことであり、だからこそ交換されねばならなかった。いわゆるW-Wというフォーミュラで表わされるものである。この両端にあるW（商品）が、それぞれ異なった使用価値を持つものであるのは断わるまでもない。これを基本形にして、この両端のWを媒介するもの（交換手段）すなわち貨幣（G）が登場した。W-G-Wフォーミュラである。このGは貨幣を表現するばかりでなく、両端にあるそれぞれの商品の価格をも表現している。ただしここでの価格は、この両端にある商品（W）の生産を前提にして、その適正な交換を行なう価格のことである。

これに対して奢侈・貨幣を追求するところで現われる貨幣あるいは価格は、

これとは異なった $W-G$ あるいは $G-W-G$ というフォーミュラで表わされる。ここでは、右端に現われる貨幣(G)あるいは価格は、別にその左にある商品(W)の生産を特殊的に前提する必要はない。このフォーミュラの中では、右端の G が左端の G より大きくありさえすれば、あるいはここでの W が G をもたらしさえすれば、それで十分である。ということは、ここでの市場は、貨幣をもたらしための場、あるいはもっと正確には利潤をもたらしための場としてのみ意味が与えられている。だからここでは、価格を考えるにしても、まず初めに市場とか交易というのが前提にあって、そこで価格が決まり、しかる後、生産の場にそれがもちこまれるのである。

スミスが自然価格という場合、すでに述べたように、そのなかには労賃・利潤・地代の自然率が含まれていた。だから商品がこの価格どなりに売られても、それは利潤も地代も実現する。これに対して既成の市場概念と価格概念に依拠する場合には、利潤は市場とそこでの価格とに依拠する。スチュアートに言わせれば、次のようになる。「商品の価格の中には二つのものが現実存在していて、しかもそれは全く異なっている、とわたしは考える。それは財貨の実質価値(real value)と譲渡にもとづく利潤(profit upon alienation)とである。本章の目的はこの区別を明確にすることであり、さらに交易の作用がどのように前者ならびに後者の水準にそれぞれに影響を与えるかを、換言すれば、交易はどのようにこの二つのもの——これらは交易なしには全く漠然としていて不確かであろう——を固定させ確定させる効果をもつかを明らかにすることである」(『経済学原理』、第2編、上巻、p. 43)。

スチュアートのなかでも、実質価値といういわば生産価格が前提されているが、ここでの利潤の規定のされかたがスミスのそれとは異なっている。スチュアートにあっては、実質価値を越えて市場で実現されるものはすべて利潤であり、その多少は市場での当該商品に対する需要に依存する。しかもかれにあっては、その実質価値の大きな部分を占める勤労者の生計および経費(労賃)は、交易の普及している度合いに依存するというのである。「商人が手広く取り引きをおこない、しかも仕事と需要の均衡の把握に絶えず努めるならば、こうした情況はかれら商人の知るところとなり、さらに勤労者たちにも伝達される。勤労者はそこで、自分たちが手にしうる一定の利潤を念

頭において、その生計と経費を規制する」(前掲訳書, p. 45)。要するにここで主導権を握っているのは商人たちである。かれらは、市場における需要に常に気を配り、それに適合するように生産を導く。生産者たちは、商人がもたらす情報に依拠して自分たちの生産価格を設定する。かれらは、自分たちの生産価格を過大評価することは許されない。そうすることが市場での需要を維持することだとされるからである。だから市場こそがすべてに優先する。

スチュアートも、価格は実質価値より低くあってはならないとは述べている。しかしかれはこの実質価値の尺度を生産の場で規定してはいない。これはあくまでも市場での需要に依存し、商人たちの活動に依存する。スミスの自然価格という概念は、すでにこれに先立つ価値論の展開を前提にして、分業・生産の論理の延長上に構想されている。だから市場での価格は、生産における価値を規定するものではなくて、生産過程での価値を実現するものとして、いわばその結果として登場すべきものだった。その意味で、スミスの自然価格という概念は、きわめてイデアルな質を持っていると言うべきだろう。そしてスミスがこうしたイデアルな価値概念を構想しえた理由は、先にも挙げたように、生産というものを拡大再生産として定式化したこと、生産をそれ自体として自立した力を持つ領域として構成しえたからに他ならない。これは、俗っぽい言い方をするなら、かれが、利潤の成立する場を、市場とか交易といった領域ではなく、生産過程として理論化しえたからだとすることができる。だからこそ価値論が必要だった。要するに、市場を生産に従属するものとして描くために、この自然価格という概念が生れたといえよう。しかし、これで現実の市場がすべて再構成されてしまうなどということは勿論不可能である。自然価格と現実の価格との関係が問題にされねばならない。

スミスにしても、現実の市場価格が常に自然価格に一致するなどとは考えていない。もしそのようなことを考えていたのなら、『国富論』はここまでの叙述で終わってしまったことだろう。現実の市場価格は、市場に持ちこまれる商品の量とそれに対する需要との割り合いによって決ってくる。とすると、このスミスの主張とスチュアートのそれとはどのくらい違いがあるのだろうか。後者においても、実質価値を所与として、それに市場での需給関係に

よる利潤が付加されて価格が決定されていた。ただスミスの方が合理的な方法だと言えるのであれば、かれの場合には、労賃・利潤・地代についての自然率というものが予め想定されていて、しかもそれらの三つの要素は、生産物の価値の分解部分としてすでに生産過程においてそれぞれに規定されていることである。だからかれにとっては、その自然価格と現実の市場価格とが乖離しているとしても、具体的に、利潤・労賃・地代のうちの何がどの程度乖離しているかを問題にすることができる。例えば現実の市場価格のうちで、地代が自然率以下であるならば、地主たちはその土地の一部を引き上げて他の部門にその土地の使用をまわすだろうし、利潤や労賃がそうであるなら、資本家（雇い主）や労働者はそれぞれ資財や労働を他の部門に引き上げることになるだろう。だからもしそれぞれの移動に対する「完全な自由」があるところであれば、市場価格は自然価格へと収斂していき、そこに均衡状態が成立するはずである。こうしてスミスは価格というきわめて現実的なものを見ていくためのいわば座標軸を設定することが可能になった。

スミスにとって、狭い意味での経済学の叙述が始まるのはここからである。自然率あるいは自然価格という概念は、たしかにきわめてイデオールな性格を持ってはいるが、しかしこの次元に留まっているかぎり、それが具体的な現実の価格に対して「現実的」な座標軸として成立するかどうかは不明のままだろう。それらが現実の価格の動きに対して、言い換えれば現実の市場に対して、それを捉えていく過程こそが問題だろう。これが「経済学」と呼ばれるものである。スミスは言う。「自然価格そのものは、賃金・利潤および地代というその構成部分の各々の自然率とともに変動し、またあらゆる社会では、この率はその諸事情、すなわちその貧富、その進歩・停滞または衰退の状態にしたがって変動する。わたしは、次ぎの四つの章で、できるかぎりあますところなく明瞭に、それらの様々の変動の諸原因を説明しようと努力するつもりである」(p. 155)。自然率・自然価格というものは、スミスのなかでは、社会の種々の事情によって変動する。社会の種々の事情のなかで、スミスが今まで叙述してきた近代的分業社会がどのようにして自己を実現していくのか。この第1編第8章以降の叙述は、これを具体的に、あるいは「経済学的」に述べていく過程である。ただそのなかでも特に地代についての叙述

には注意を払う必要がある。スミスの中で、社会理論としての地主階級の位置づけと、経済学的な意味での地代節儉の規定とが、互いに交錯しているように思える。スミスの経済理論体系のなかに現われる矛盾した叙述の多くは、概して地代規定と関わる場所に見出される。

〔Ⅳ〕 自然率の変動と市場

スミスは、第1編第8章から11章までの四つの章を次ぎのように書きすめめる。すなわち、「労働の賃金について」、「資財の利潤について」、「労働と資財の様々な用途における賃金と利潤について」、「土地の地代について」である。この四つの章のうち後の二つの章はさらにその中がいくつかの節に区分されていてその量もかなりある。ちなみにこれら四つの章だけで第1編の4分の3ほどを占めているし、とくに第11章の「地代について」は、それだけで第1編全体の5分の2ほどの量を占めている。量が多いということから直ちにこれらの四つの章が第1編での中心的なものだとは言えないだろうが、しかし、これら四つの章での叙述がスミスにとって重要な課題であったと想像することは可能だろう。もっともこのように述べてはみたものの、実際の四つの章を読むという作業はきわめて退屈である。退屈さの理由は、かれによる命題の証明方法にある。かれの場合、何か或る命題を立てると、それを証明するために次ぎから次ぎへと例が挙げられていく。これら四つの章全体でスミスが説明しようとしている命題そのものはあまり多くはないが、このような方法でそれが進められるため、どうしても量が多くなってしまふ。

わたしは、すでに何度か、スミスにとって狭義の経済学の叙述が始まるのはこの第8章以降だと、述べてきた。第8章以降のテーマは、賃金・利潤・それら両者の関係、さらには地代というように、たしかにこれ以前のものに比べれば経済学の対象ということが出来る。ただ、いま上で述べたように、その説明方法はきわめて事実羅列的な方法であって、けっして理論的だとは言いがたい。ということは、厳密に考えれば、対象は「経済」的な対象であるとしても、叙述は「経済学」的だとは言えないのかもしれない。しかしその冗長とも思える事実の羅列の中から次第に姿を現わしてくる世界は、「経済学」を考えるためのもっとも基本的なところ、すなわち「市場」である。膨

大量のいろいろな事例が次ぎから次ぎへと引き合いに出され、それらが7章までに述べられてきた「原理」にしたがって次第に整理されるにつれ、現実の市場はスミスの市場に組み込まれていく。その意味でなら、これらの叙述を「経済学」的と呼ぶことも許されるだろう。市場というものは、スミスの考えられるならば、たしかに経済学的なものと考えられるかもしれないが、現実にはそのようなものとしてはまだ機能しえてはいない。それをスミスは価値論・自然価格論に依拠しつつ整合的に組み立てていく。ちなみに19世紀末から20世紀にかけての議論は、このスミスの作業とは全く逆に、市場を純粋な経済学的な領域から解放し、社会学的要因やあるときは心理学的要因・政治的要因をも入れながら再構成し始める。そしてその目指すところは、経済学そのものの相対化の方向だった。だからこれら四つの章でのスミスの営為にたいし、これを、たとへまだ未熟ではあるとしても、市場を経済学的に統一的に捉える努力と考えていくことは、許されるだろう。

(1) 労賃と利潤

スミスは、労働者の賃金と資財の利潤とを、最初はそれぞれ別々に論じ、その後それを一緒にして述べていく。ここではその三つの章にわたる長い叙述の中からホンの一部分を、経済学的な市場の構成というところから整理していこう。

スミスの価値論についてはすでに見てきたが、そこでは労働が価値の尺度としておかれていた。そしてこの尺度としての労働というのは、分業の中での労働に対する孤立した労働、あるいは自然のままの労働として表象されてくるものだった。スミスの中では、分業の中で機能している「文明化」(civilized)された労働は、孤立した未開の自然のままの労働に比べてはるかに大きな生産力を持っていた。そしてこの労働の拡大された生産力の程度を測る尺度として自然の労働が置かれ、その関係が投下労働と支配労働の関係として理論化されている。だがスミスの場合、この「文明化」された労働＝分業労働が作りだす価値の三つの分解部分、すなわち労賃・利潤・地代にそれぞれ対応する三つの部分の比率を決めるということは確かに困難であった。かれの中では、労働と労働力の区別もないし、したがって必要労働と

不払労働という区別もない。だからかれの場合、これらの比率とはいっても、この比率そのものについての考え方とそれの具体的な割り合いの両方を考えていかねばならない。そして自然価格という概念は、その際に、この両者を同時に捉えていくための装置だったといえる。

さてこの比率を考えていく際のもっとも基本的な部分は、労賃に対応する部分だろう。そしてこれが決ってくれば、利潤に対応する部分も文明化＝分業化の指標として次第に固まってくる。スミスは言う。「土地の占有と資財の蓄積との双方に先行する事物の本源的な状態のもとでは、労働の全生産物は労働者に属する。かれは、ともに分け合うべき地主も親方も持っていない」(p. 157)。スミスにとっては労働こそは出発点である。土地の私有の問題は今おくとしても、少なくとも文明の進歩した社会では、生産は分業として営まれる。そこでは資財を所有する親方によって労働が有機的に分割され、その結合労働は孤立した自然のままの労働の単純総和以上の成果を生み出す。そしてこの差額は親方の所有するところである。しかしこの差額を生み出したのはあくまでも労働、結合労働という労働である。スミスはつねに、商品を作り出すのは労働だという前提を離れない。だからここでも初期未開社会の再確認を行ない、価値論の構想を再確認させる。この前提のもとでは、まずなによりも商品を作り出した労働者に対して、その労働を可能にした力＝エネルギーに見合う賃金が支払われねばならない。労賃は、利潤や地代のようないわゆる控除部分ではない。これは価値論以来のかれの根底にある考え方である。

労賃部分に対する考え方はそうであるとしても、現実の労賃はもっと具体的に決まる。スミスは言う。「労働者の普通の賃金がどうなっているかということは、どのようなところでも、その利害関係を決して同じくしない両当事者（親方と職人）の間に結ばれる契約に依存する」(p. 160)。現実の契約というものは両者の力関係によってきまっていく。そして力関係から考えれば、親方たちの方が有利なのは目に見えている。かれらは十分な資財を持ち、自分たちに不利になるような契約を結ぶのを避け、有利なそれを結べるようになるまで時間をかせぐことができる。さらに彼等は、労働者に比べて数も少ないから容易に団結して、労働者の要求を抑えつけることさえできる。これ

に対して労働者たちは、貯えも少なく数も多い。その上、権力は、親方達の団結には目をつぶっているのに、労働者のそれに対しては弾圧してくる。これでは、この両当事者間の契約はつねに親方達に有利で労働者・職人にとって不利になる。しかし、たとえ親方たちが強く、労働者が弱い立場にあるとしても、それ以下には下げられない賃金の最低限度というのはある。商品を作るのが労働者であるとしたら、その労働者が自己を維持し再生産していくのに不足するような額にいつまでも賃金を抑えつけておくことは不可能だろう。「人間というものはつねに自分の労働によって生活しなければならないし、またかれの賃金は、少なくともかれを扶養するに足りるものでなければならない。大抵の場合、賃金は、幾分かはこれ以上のものでさえなければならないのであって、さもないかぎり、かれは家族を養育することが不可能であろうし、このような職人の家系は一代かぎりになってしまうであろう」(p. 163)。スミスは、だからといって、ここで具体的にその最低水準を数字で示すようなことはしない。これはあくまでも賃金というものを考えていくための考え方の基礎になるものである。

スミスにとって、富とは必需品・便益品であり、それを作りだすのは労働だった。労働こそは社会の土台を構成していた。だからかれは、労働というところに目を据えて社会を見ていこうとする。「様々の種類の使用人、労働者および職人は、あらゆる大政治社会の圧倒的大部分を形づくっている。だからといってこの大部分のものの境遇の改善が、その全体にたいして不都合とみなされるはずは断じてない。成員の圧倒的大部分が貧しくも惨めなのに、その社会が隆盛で幸福であるはずも断じてない。そればかりではなく、人民全体を食べさせ、着せ、そして住まわせる人々が、自分自身もまたかなり十分に食べたり、着たり、そして住んだりしうるだけの、自分自身の労働の生産物の分け前にあずかるということは、まったく公正というほかはないのである」(p. 179)。たしかに労働者の状態あるいは労賃というものを指標にして社会を見ると、社会はそれまでとは随分異なった姿を見せてくれるようになる。かれの分け方にしたがうと、社会は三つの状態に分けられる。進歩しつつある状態、停滞している状態、衰退していく状態、この三つである。これらの中から何が新しく見えてくるのか。

ここでスミスが、進歩している状態と述べている社会は、一言で言ってしまうと、先にも見たような拡大再生産の社会である。すなわち、「毎年の仕事がその前年に雇われたよりも多い数の者に提供される場合」(p. 164)がこれである。ここでは労働者にたいする需要が絶えず増大し、その結果かれらの賃金は引き上げられていく。労働者の賃金というのは、現実には親方たちとの契約における力関係に依存している以上、概して労働者には不利であった。にもかかわらずこの状態でなら、かれらは、親方たちにたいして比較的有利な立場に立てる。ここでは、拡大再生産という「経済」の領域が社会を支配し、それ以外の「政治」的あるいは「社会」的要因が働くのを阻止している。

停滞している社会や衰退しはじめている社会ではこうはいかない。たとえそれがどれほど大国であるとしても、生産において生じる余剰——停滞や衰退の状態でも分業はあるのだから——は、生産の方へはまわされずに、すべて消費されつくしてしまうか、あるいはもっとひどくて、過剰に消費されてしまう。そしてその分だけ政治的力や古い社会的力は保持されあるいは拡大される。重商主義的あるいは絶対主義的構想では、これが望まれる状態だろう。しかしその結果、市場において働くのは経済の論理よりも政治や古い社会の論理ということになる。ここでは労賃というのは、たんなる生産費の一部分でしかなく、できるだけ小さく抑えておくことだけが意図される。こうした発想が先のスミスの引用文とかけ離れたものであるのは明らかだろう。

たしかにそれまでの基準で考えるなら、フランスや中国は多くの富を持ち、政治的にも軍事的にも強力な国と見えただろう。しかしスミスの基準で描かれた未来社会の中には、フランスや中国といった既存の大国の姿は入っていない。重商主義的な発想のなかでなら、イギリスにおいてもフランスは先進国であり目指されるべき未来だろう。だがスミスの構想の中では、かれの時間はそこへと向かって進んでいく時間ではなかった。人間本性という「過去」から、重商主義的な「現在」と交叉しそれを横切って、それまでの未来にはなかった「未来」へと向かう時間こそが、かれの時間である。この時間に依拠して、スミスは、既存の重商主義的な市場のなかに、経済学的な、すなわち生産・分業の論理が働く領域を拡大しようとするのである。それは、

高賃金が実現されている社会を持ち上げることであり、同時にこれは商品生産が分業によって花開いている状態を必要条件とするものであった。だからかれの経済学を「高賃金の経済学」と呼ぶのは正しいが、ある意味ではこれは同義反復のようなどころがある。というのは高賃金を保証している社会だからこそ、経済学にその活躍の場が与えられているとも言えるからである。

さて次ぎに資財の利潤の話に移ろう。労賃のときもそうであったが、利潤についてこれを確定することはきわめて困難なことである。それでも労賃のときは、まだ労働者の再生産費とでもいうべきものを出してきて、これを考えていくための基礎をつくることはできたが、利潤についてはそれすら困難に見える。「利潤は、非常に波動するものであって、ある特定の事業を営んでいる人でさえ、かならずしもつねに自分の年利潤の平均がどれだけかということをお話ぬほどである。それは、かれが取り扱う諸商品の価格のあらゆる変動から影響を受けるばかりではなく、かれの競争者と顧客との双方の運不運からも、また財貨が海路あるいは陸路のいずれかで搬ばれているとき、もしくは倉庫に貯蔵されているときでさえ蒙りがちな、他の無数な偶然事からも、影響を受ける。それゆえそれは年々に変動するばかりではなく、日々に、いなほとんど時々刻々に変動している。一大王国で営まれているありとあらゆる事業の平均利潤がどれほどかを確認するのはなおさら困難にちがいないし、またかつてのそれがどれほどだったろうかとか、あるいは遠い昔のそれがどれほどだったろうかとか、ということをおある程度正確に判断するなど、まったく不可能にちがいないのである」(pp. 192-193)。

資財の平均利潤を決めていくという作業は、たしかにスミスにとっては困難なものだった。そもそもこの第1編の段階では、まだ資本蓄積という課題はそれとしては提起されてはいない。これでは利潤を純粹に経済理論的に解いていこうにも、それを考えるための概念装置が不備になるのは避けられない。だからかれがここで平均利潤率を決めるために用いるのは、全く経験的な基準すなわち利子率である。かれは、この利子率と利潤率との関係でここでの叙述を通してしまう。スミスに言わせると利子率の2倍ぐら이가利潤率として妥当だろうということになる。かれの場合、少なくともこの段階では、種々の個別資本を、それらにそくして論じるだけの準備は出来てはいない。

利潤というものが問題になるなりかというものは、本来、それはきわめて個別的である。だからそのなかから平均利潤率というようなものを考えていこうということ自体が一般的ではない。しかしスミスの場合、自然価格を構成する労賃と利潤との関係を合理的に組み立てないことには、かれの構想する市場の概念はつねに曖昧にさせられてしまう。だからこそかれはあえて社会全体にとって利潤というものがどのように位置づけられるかというかたちで問題を立てたのである。そしてそのかぎりでなら、総資本に対する総利潤という枠組で利潤率を問題にすることができるし、それを利子率との関係から導きだすことも不可能ではない。

スミスは、利子の2倍ぐらいが妥当な利潤だとは述べるが、この根拠は理論的なものではない。ただ商人たちが普通そのようにしているということ以外には特別に何も書かれてはいない。かれがこの平均利潤率についての叙述の中で目指しているのは、利子率の高低と社会の富裕の関係といった方が適切かもしれない。社会が進歩していくにつれて、利子率は次第に減少し利潤率もそれにつれて下がってくる。これは自然のプロセスである。しかし利子率や利潤率が下がったからといって蓄積がやむというのではない。「大きな資財というものは、たとえ利潤が小さくても、大きな利潤をとまなう小さな資財よりも一般にもっと急速に増加する」(p. 201)。このような方向で豊かになってきた国では、それゆえ、利子で生活をたてるなどということは、余程の富者でもないかぎり無理になり、誰もが勤勉に働くことになる。スミスはその例をオランダに見ている。そこでは誰もが利息で生活しようなどとは考えずに、自分で事業を行なうのが「流行」にさえなっていると言うのである。そして働いていないものは「怠け者」として軽蔑されているときえ述べている。「国富論」全体をとおして、スミスが未来の望ましい状態と考えているのは、こうした状態にあるオランダあるいは北アメリカということができらう。

少なくとも労賃と利潤についての叙述から導きだされる主張は、高賃金と低利潤ということに帰着する。社会が進歩している状態では、賃金は上昇していく。もしこれと同様に利潤も上昇していくなら、自然価格そのものが引き上げられ、これは種々のマイナスの効果を結果する。このようなことはス

ミスの望むところでは勿論ない。労働者への高賃金を保証しつつ、それをつぐなうように低利潤が定着するなら、自然価格も低く抑えられ、低賃金・高利潤の国々との競争でも十分やっつけていける。しかもこうしたことが社会的に認知されていくということは、低賃金・高利潤の場合よりも一層市場そのものの合理的で継続的な運動を保証してくれるだろう。スミスが求めているのはこうした社会だった。そしてこれは同時に、経済学が活躍できる社会であり、経済的に合理的な市場が支配する社会でもあった。

労賃と利潤について、それぞれ個別に論じてきたのち、スミスはこの二つの関係・比率について論じていく。もっとも比率とはいっても、これをどのように決めていくかということが問題なのではなく、これが何故不平等を生みだしてきたのか、あるいは何故そのような不平等な比率が維持されてきたのか、ということが問題になる。社会的な理由や政治的な理由が取り上げられ、その過程で、ここでも徐々に市場が経済的に合理的なものへと組み換えられていく。

一般的に考えても、種々の職種によって、賃金や利潤の比率は異なるだろう。そしてそうした不平等が、ある種の社会的な慣習になっているところでは、その不平等は一層固定化されていくおそれがある。スミスがここで挙げてくるもの、すなわち職業そのものの快不快、その習得の難易と習得費の大小、それらの職業における就業の恒常性の有無、それらの職業の従事者に払われる信任の大小、これらの職業において成功する可能性の有無、こうしたものは、たしかに賃金や利潤における不平等をつくりだす原因になっている。それらは、たとえ偏見とは言わななくても、いわば社会的慣習として定着し、これに関わる人々の心理的なところにまでその影響力をふるうこともありうる。例えば、徒弟制度をとおして受け継がれてくるような職種は、こうした慣習や意識に依拠していつまでもそこの特殊な労賃と利潤の関係を維持し、かつ再生産している。しかしスミスはこうした慣習といったものには概して寛大である。いろいろとこれらの問題を検討はするが、かれは最終的には、これらの原因から生じる不平等は、もし完全な自由が保証されるならば、たがいに相殺されて、社会全体としてみれば如何なる不平等をも生みださないと結論づける。「上述した五つの事情は、たとえそれが労働の賃金

や資財の利潤にかなりの不平等を引き起こすとしても、労働と資財の様々な用途についての、実際上あるいは想像上の利益と不利益の全体については、どのような不平等をも引き起こさない。これらの事情の性質は、ある用途における少額の金銭的利得をうめあわせ、他の用途における多額の金銭的利害を相殺するものなのである」(p. 233)。少なくともスミスのなかでは、ここで言われるような不平等の多くは、知識・情報の不足や投機家たちによる思惑といった市場の正常な動きを阻害するものが働きさえしなければ、かならずや自然の状態へと戻っていくと考えられている。『道徳情操論』を上げるまでもなく、経済生活が次第に大きな領域を獲得するにつれて、慎慮の美德も広がっていき、そこでの人々の行動の動機というものも次第に経済学的に見て合理的になると考えられる。とすれば、その過程でこうした社会的な慣習による利潤や労賃の不平等も相殺されていくと考えるのは自然だろう。

スミスが挙げるもう一つの理由は問題をはらんでいる。すなわち政策的、あるいは政治的な理由である。かれは、ヨーロッパの政策が引き起こした不平等を次ぎのようにまとめてみせる。「それは主として次ぎのような三つの方法によってこういう不平等を引き起こしている。すなわち第一に、若干の職業における競争を抑制し、さもなければこれらの職業に就きたがるであろうよりも少数のもの競争にしてしまうこと、第二に、他の職業では、自然に行なわれるであろうより以上に競争を増大させること、そして第三に、労働と資財が、職業から職業への場合にも地方から地方への場合にも、自由に流通するのを妨げること、これである」(p. 239)。

かれが具体的に挙げてくる例は、同業組合の排他的特権、徒弟修業の期間や人数を定めた種々の徒弟条例、さらにはある特定の職業に人々を引き付けるような奨学金・補助金等の制度、労働の自由な移動を妨げる救貧法を含む諸制度といったものである。これらについては、詳しい説明は不要だろう。ただ注意されるべきことは、こうした諸制度が都市の手工業の排他的特権を確立し、その結果、都市で生産された商品が農村での利益を収奪してしまうことにたいする批判である。「たとえどのような規約でも、さもなければより以上にこれらの賃金や利潤を増大させる傾向を持つものは、都会がそのヨリ少量の労働で、農村におけるヨリ多量の労働の生産物を購買することを可能

にする傾向をもっている。つまりこれらの規約は、都会の商人や工匠に、農村の地主、農業者および労働者より以上の利益を与え、しかもさもない場合に都会と農村との間に営まれる商業から生じるであろう自然的平均を破壊してしまうのである。社会の労働の年々の全生産は、これらの異なる二群の人々のあいだに年々に分割される。これらの規約があるため、さもない場合その手に帰するであろうよりも大きな分け前が都会の住民に与えられ、小さな分け前が農村の住民に与えられるのである」(p. 250)。

もしも都市の内部でだけ市場が成立しているのなら、それらの不平等はたがいに相殺されるかもしれない。しかし、市場が農村をもその中に含んで発展しはじめようとするやいなや、都市による農村の収奪という事態が必然的になる。スミスの場合、すでに述べてきたように、商品というものは必需品・便益品というところで捉えられていた。奢侈品というものが商品であるかぎりは、市場を都市に限定することも、あるいは都市を中心に序列化することもできただろう。しかしスミスのなかではそれは不可能である。W-Wフォーミュラで構想される商品は、あくまでもそれぞれの商品生産の均衡を実現していかなばならない。自然価格という言葉もこうした均衡を表現する価格のことであった。

分業論に始まり価値論・自然率・自然価格へと進んでくる過程で、つねにその背後に隠されて表面には出てこなかった既成の市場というものが、漸く具体的に姿を現わしはじめたといえる。都市の内部や都市と都市との間で成立している市場がそれである。スミスはこれを、都市と農村との両者をそのなかに包摂した市場をもとにして批判し、これを商業社会として再構成していこうとしている。もちろん既成の市場にしても、それは農村を含んではいるだろう。だがそこではあくまでも都市が中心であって、農村はそのためのものでしかなかった。そしてこうした事態が続くかぎり、農村は都市に収奪され続ける。スミスは、これら両者を、かれの新しい市場概念のうえで、新しく捉えなおそうとしている。そのための理論的前提は、分業論・価値論・自然価格論のなかで、ほぼ出そろってきた。そしてこの新しい市場を捉える鍵は、具体的には「資本」である。そしてこれが第2編のテーマになる。

ただスミスの場合、ここから直ちに「資本」へは進まない。かれのなかに

はもう一つの平衡感覚が働いている。それは社会の進歩の結果、都市の生産物の価格は徐々に引き下げられるのに対し、農村での生産物は逆に、それと比較した場合、相対的に引き上げられていく、ということがあるからである。スミスは、重商主義に対してよりも重農主義に対するほうが、その行き過ぎを許容するところがある。しかしだからといって、農業の利益を偏重するようなことはしない。「資本」へと進むまえに、是非農業あるいは地代のことを片付けねばならない。そしてわれわれは、ここにかれの独特の「資本」についての理論構成を見ることになるだろう。地代論の話しに移ろう。

(2) 地主の社会的位置と地代

第11章の「土地の地代について」に入ろう。この部分は、先にも触れたように、きわめて長く、内容的にも非常に細かい議論が展開されていて、それに付いていくのは苦勞するところである。しかしスミスの社会認識の質について考えていく場合には、この部分はきわめて大きな意味をもっているとも言える。

スミスは、既に第6章で、地代も、労賃や利潤と同様、交換価値の源泉でありまた収入の源泉でもあると述べていた。しかし、注意深く読むと、地代が価格の構成要素とされる方法と利潤や労賃の場合のそれとは若干異なっていた。利潤については、職人たちが原料に付加した価値の一部と説明されていたのに対し、地代に対しては、価格の構成要素とは言われていても、これが生産過程であらたに作り出された価値であるというようには捉えられていない。スミスの価値論が、理論的に曖昧であり投下労働価値説を放棄していると批判されるのは、にもかかわらず彼が、この地代部分をも価値の源泉として、あたかも価値の分解部分であるかのように述べたからである。

しかし、今この11章での叙述を見ていると、6章での展開はそのままスミスの言葉どうりには理解しにくくなってくる。だから、ここではまずスミスが地代に対してこの11章で与えている規定から見てみよう。彼は次のように言っている。

「借地契約の条件をとりきめる場合、地主は、借地人が種子をとり、労働に支払い、家畜その他の営農用具を購入保全すべき資財を維持するのにとり

る額に、その近隣における農業資財の通常の利潤を加えた額よりも大きな生産物の分け前が、借地人の手もとに残らぬよう努力する。この分け前は、明らかに、借地人が損をせずに満足できる最小の分け前であって、地主がこれ以上の分け前をこえる部分を……この土地の地代として自分の手もとに留保しようとするのは当然であり、またこの地代がその土地の現実の諸事情のもとで借地人が支払いうる最高のものであることも明らかである。」(p. 279)

ここからも理解されるように、地代として提起されている価格のこの構成部分は、生産過程からそこに与えられたものではない。これはいはば利潤の実現の段階で、平均利潤を越える部分の地主による控除というように言うことができる。だからスミス自身、ここでは地代は価格の結果だと述べるのである。彼は言う。「注意すべきことは、地代が賃金や利潤とは異ったしかたで諸商品の価格の構成に参加するということである。賃金や利潤の高低は価格の高低の原因であるが、地代の高低はその結果である。特定の商品の価格に高低があるのは、その商品を市場へもたらすために支払われなければならない賃金や利潤に高低があるからである。しかし、その商品の価格が生み出す地代が高かったり、低かったり、あるいは全然地代を生じなかったりするのには、その価格に高低があるからである」(p. 281)。

こうしたスミスの地代認識は、第6章の(交換)価値の源泉という「誤解」を呼ぶような規定とは明確に異なっている。その上、この11章では、彼は地代を独占価格と呼び、また、土地の豊度あるいは市場からの距離によって地代が異なることまでも述べている。こうした理解の中には、たとえまだまだ曖昧さは残るとしても、絶対地代とか差額地代として後に理論化されていくものに対する正しい認識がなされているのを見ることも可能だろう。更にもっと大きな問題としては、先の引用からも推測されるように、地代というものについて、これを利潤からの控除部分として捉えているような叙述もあった。しかし、では何故、第6章で商品の交換価値・価格を述べる際にこうしたことを配慮した叙述がなされなかったのだろうか。少なくとも、狭い意味での経済学的叙述が展開されるようになった8章以後の現実の自然率の変動を考えていく過程、いわばレアールな世界の叙述は、価値論の叙述に比べるなら、論理的な飛躍も断絶も余り気にならなくなっていることは確かである。

しかし何故彼は6章で交換価値の源泉に地代を入れてしまったのだろうか。ここに地代が入ってきてしまったために、価値論そのものの展開が、一見すると投下労働価値説から大きくはずれたかのような印象を与えてしまい、これが多くの「誤読」を誘発したことは否定できない。参考までに、『国富論』が出版された時にヒュームからスミスにあてて書かれた手紙の一節を引用してみる。ヒュームはその中で『国富論』の出版に最大級の讃辞を与えた後、一言、「君がいまこの部屋に座っているものならば、小生は君といくつかの問題点を討論したいものです。農地の地代が生産物の価格の一部をなしているとは、小生には考えられません」と付け加えている（1776年4月1日の手紙から）。たしかに、価値論としてだけ考えると、スミスが地代を価値の源泉においたことは、論理的に矛盾していた。しかし今ここで見てきたように、スミス自身は、地代というものについてかなり正確な経済学的な理論認識をもっていたことも事実である。その上、これも既に見てきたことであるが、かれの価値論も、そこに若干の理論的曖昧さを残すとはいえ、かなり正確に出来上がっていたことも、同様に事実だった。それなのに何故スミスは価値の源泉に地代を入れなければならなかったのだろうか。これが本当に答えられるには、第2編の資本論の展開をまたなければならないが、この11章の地代論の中にも、それへの若干の示唆は与えられている。

この11章の終りに、「本章の結論」という項が設けられているが、その中でスミスは、社会の諸々の事情が改善されるにつれて、土地の実質的地代は、間接にか直接にか、ひき上げられるとしている。たしかに差額地代説に依拠するなら、耕作法の改良や耕地の拡張は、地主に新たに地代の量を増加させるように働くらざらう。そればかりでなく、製造品の価格が、技術の進歩等によって引き下げられれば、相対的に地主の地代収入は、ヨリ多くの商品を購入することが可能になっていく。これは都市に対する農村の相対的に有利な交換の場を想起させる。事実これは、リカードの中では明確に意識され、地主の利害が資本蓄積に阻害的に働くという結論を導きださせることになる。しかしスミスの時はそうではない。かれの中では、資本蓄積が地主階級にとっても決して不利なものではないということの方が強調されていくことになる。すなわち、地主階級は、社会の進歩——資本蓄積の増加——にとまなっ

てより大きな地代を得ることが出来るのである。スミスは、だから地主階級の利害は、社会の一般的な利害と一致すると結論づけることができたのだった。勿論、地主階級は概して怠惰で無知ではあるが、少なくとも彼らが自分自身の階級の利害について知識をもっている場合は、自分達の特殊的利害を追求するという目的のために「公共社会を誤導することは決してありえない」(p. 433)とまでスミスは言い切れるのである。スミスの中で、新しい市場の構想を矛盾なく描ききるためには、どうしてもこうした地代規定および地主の社会的役割の確認という作業は、不可欠だったのである。

繰り返すが、スミスにとっての重要な課題の一つは、地主階級の利害を、社会全体の利害と一致するものとして描き出すことにあったということが出来る。意外と思われるかも知れないけれども、スミスの中では、資本家階級は、地主階級とは反対に、自分自身の階級の利害の追求に急なあまり、公共の利害についての知識を余り必要とせず、悪くするとしばしば公共の利害を阻なう場合さえあると言われるのである。「商業や製造業のある特定部門における商人たちの利害は、つねにある点では公共社会のそれと異なるし、それと対立する場合さえある。市場を拡大し競争を制限するのは、つねに商人たちの利益である。市場を拡大するのは、しばしば公共社会の利益と十分一致するであろうが、競争を制限するのは、つねにそれに反せざるを得ない」(p. 435)

商人資本的な資本家階級に対する彼の評価は、彼の重商主義批判の文脈で十分に理解可能だが、地主階級に対する評価は、その同じ文脈の中では単純には理解されにくい。ただ、この第一編の叙述に関する限り、地代が価値の構成部分だという彼の主張となら、この主張はスムーズに受け入れられていく可能性をもっている。資本家・労働者・地主という三大階級の収入を、それぞれ価値の源泉としたことは、それらがすべて労働・あるいは生産過程に対して強い影響力を持たねばならないものとして、構想されていたのだとも言える。そして彼の投下労働と支配労働の関係はいはばそうした労働過程・生産過程そのものを包摂する関係を表現していた。だから構成価値論として登場する価格論は、それをめぐっての社会的三大階級の役割分担を示すものと理解することができる。ここにおいてこれら三大階級は、商品

生産という所を基準にして新しく再構成されていくことが可能になったのである。

後にリカードの時代になって、彼が投下労働に一元化した価値論を構想できるようになるのは、商品生産に関して地主階級の存在が障害になってきたからであり、だからこそ、この階級を資本制的蓄積の枠からはずしてしまうことが可能になっていたからでもある。そしてその際の彼の理論的武器が差額地代論であったのは、余りにも有名である。これは、第2編で改めて問題になるところではあるが、スミスにとっては、地主のもとに蓄積されていく地代収入を、生産過程に新たに導入していく必要を強く意識していたと考えることができる。そしてそれが、彼の価値論や蓄積論において、現在のわれわれの目から見た場合、その理論的整合性を喪なわせていくところだったとも言える。